
ミチハルへ

愛 知由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミチハルへ

【Nコード】

N4673H

【作者名】

愛知由

【あらすじ】

母親の児童虐待により、妹とともに児童福祉施設に引き取られた由真^{ゆま}。普通でありたいと願い続けたが、一人の変なピアノ少年、ミチハルと出会い、恋をするうちに彼女の”普通”の定義はだんだんと変ってゆく…

ブローグ

中二の冬、母がまた離婚した。

何が原因かなんて知らないし、別に知りたくもなかった。

第一、もう二ヶ月くらい自分の部屋とトイレと台所くらいしか行っていない。

学校にも行っていない。

だからとにかく……

私にとって重要なのは、ここを引越す際に恥ずかしいノート類をすべて処分する事くらいで、母に対してとか、ましてや養父に対してなんの感情も持てなかった。

当たり前でしょ？私の味方はここには居ないって体言してたのは貴女たちの方じゃない。

中二の子供の分際で人生を語るつもりは毛頭無いけど、だからと言って何にも学習しないで十四年間も生きてきた訳でもないし、自分に降りかかる火の粉は、極力自分の力でどうにかしてきた。

先生や親友さえ時には獣となって牙を剥くこの時代、むやみに人に甘えることもしなくなった。

つまりこの先も私は、信用できない人間にはついて行かないって事！

最近泣きそうになったら、そう考えることにしているのだった。

四日後、すっかり荷造りを終えたこの家に”Ｔ市役所”と銘打ったライトバンがきた。
エンジンをかけたまま、運転席から人の良さそうな中年女性が降りてきた。

「おはようございます。Ｔ市役所の藤田ですが」

「・・・母は買い物です。どうしたんですか？」
と、言うが早いか、女の人は怪訝な顔をした。

「買い物？お母さん、そう言ったの？」

「言っただっていつか、家に居ないから・・・たぶん」

「妹さんは？」

「え？・・・ああ、二階に居ますよ」

「ああ・・・！そうなの・・・」

話が見えない。引越し先の市営団地の事かな？

女の人は数秒間黙って、やがてため息交じりにこう続けた。

「あなたは中学生のようだし、しっかりしてそうだから本当のことを言っわね」

「実はこのお家の周りの人がね、あなた達の悲鳴や泣き声を聞いて半年前にこちらに連絡を下さったの。児童虐待という言葉、知ってる？」

そこまで聞くとようやく状況が呑み込めた。

先々月、学校へ行った最後の日、登校後そのまま担任に車で病院に連れて行かれて、下着姿で看護婦さんにいろいろ訊かれたりした事も此処で意味をなしたのだ。

「施設に行くんですか？妹は？・・あの人は？警察に捕まったんですか？」

「ええ・・まあ・・妹さんもあなたも、とりあえずＴ市内の児童保護施設にお引越しすることになったのよ。ごめんなさいね、半年も掛ってしまっただけ・・。」

詳しい話は市役所でするわね、いろいろと書いてほしい書類もあるの。とにかく荷物を持って妹さんと車に乗ってくれる？」

そこまで早口で言うと女の人は一度微笑んで、それからトランクを開けに車へ戻って行った。

「あゆみいー！市役所の・・。」

だめだった。声がこわばって二階まで届きそうにない。声を張り上げたらずいぶん涙が出そうだった。

階段を上りながら、私は湧き上がる感情に吞まれていた。

安堵、戸惑い、羞恥・・。

泣きたかったが、すっかりしてそうと言われた手前、誰かの前では泣くに泣けない。

踊り場のガラス窓にうつすらと自分の顔が映る。ひどく腹立たしかった。

ナツプサックに詰め込んだ大事な物と妹を連れて、車に乗り込んだ。養父は仕事に出かけていたため留守になるのだが、この家の鍵は持っていない。その旨を伝えると藤田さんは苦笑いした。

「お母さんから鍵を預かろうと思ってね・・・あ、今お母さん市役所に居るんだけど、それでお預かりしますって言ったら、『私が閉めます』って聞き入れないのよ。」

仕方ないから役員が一人付き添って、もうすぐここへ来るそうよ。」

心底恥ずかしくなり、そうですか、とだけ呟いてシートベルトを締めた。

あの人がここに戻るなら、長居は無用だ。

さようなら、長かった災難。どうか私が普通の大人になれますように
名残惜しくはなかったが、

自分の中でけじめを付けたくてそう願った。神様でも仏様でも、聞いてくれるならどっちでも良いから・・・

そうして、あの日の長い朝は過ぎて行った。

第一話 春休み

ごたごたが過ぎると、直ぐに三月になってしまった。

由真の最初の登校は、明日という事になった。

前の学校にはめったに行かなかったので、（理由なんて皆と同じよ！）

ほとんど由真には中学校という所に縁がない。

とは言え、元々したたかな性格である由真は新たな――しかも未知なる 学校生活という物に、いろいろな期待をしていた。

無論、良い事ばかりある訳ないけど。

早速問題の一つと直面したのは、十日前に施設の四人部屋に案内された時だった。

八帖ほどの部屋の両隅に二段ベッドが二つ、真ん中には折りたたみの机が一つ、そしてキティちゃん柄の座布団が四枚、散らばっていた。

いや、部屋のセンスなんてどうだっていいのよ。

問題は、ドアから見て右下のベッドだ。

枕元にはスタンドミラー、分厚いプリクラ帳、ペンケース・それら全てがライNSTOONで装飾されている。

更に由真の不安を決定的にしたのは、壁に掛けられた薄汚いリュックにマジックで太く書かれた

の文字だった。

ああ・・・なんてこった・・・。

別にギャルだからと言って神経質に避けるつもりもないけど、ギャルと不良はかなり苦手だった。

「それは千裕ちゃんのリュックよ。可笑しいでしょう」

ここの職員で一番若い、安倍先生は言った。

「この子、ギャルなんですか？」

「ギャル・・・ではないかな。普通の女の子よ。ちょっと男の子っぽいけど」

「もう一つのベッドは？布団がないけど」

「ああ。そこは高校生の子が一人居ただけど、神奈川のご親戚に引き取られたのよ。」

だから由真ちゃんと歩美ちゃんと、その千裕ちゃんの三人部屋ってことかな」

「はあ、そうですね」

「千裕ちゃんいい子だから大丈夫よ。歩美ちゃんにも心配いらないうって言うておいてね」

・・・安倍先生の言うギャルが、どの程度のそれか由真には判らなかった。

しかし夕方六時半ごろに帰ってきたこのリュックの主である千裕ちゃん、完全にギャルでも不良でもある外見だった。

きちんと部活には行っているようで、テニスラケットをむき出しで担いでいる。

部屋に入るなり、”千裕ちゃん”は目が点になった。

「あ」

「あ・・・はじめまして水澤由真です」

「あ、いや、はじめまして。加藤千裕です」

「・・・」

「・・・」

聞きたいことは山ほどある筈なのだが、どんな言葉を選んでも喉につつかえて出てこなかった。

この雰囲気のまま過ごすのに耐えられなかったのだろう、”千裕ちゃん”はとりあえず口を開いてくれた。

「つつーか、なんで敬語なんだろうね。超笑える」

「そうだね」

「どっから来たの？幾つ？中二？アタシ2-A」

「マジで！あたしも二年。南館中学から来た」

「南中かあ。え？兄弟は？」

「妹だけ。あいつは小六だよ」

「えー大変じゃん」

思ったよりもずっと好人物だったため、由真はもう少し突っ込んだ話してみた。

「千裕ちゃん、ここには何年ぐらい？」

「え。千裕でいいよ。アタシは小二ン時から」

「うっそお！長くない?!」

「なげーよ！筋金入りだし!!!っーか由真も虐待？」

「うん。マジ無理だった」

「えー。仲間じゃん。

ねえねえ、今度一緒にガッコ行かない？」

「行く行く」

由真の心配は、杞憂に終わった。

なんだかんだで十日も経つうちに、お互いの違和感は薄れていった。春休みの今も、千裕に付いて行つてはテニスだの釣りだのとあちこちで遊んでいる。

そして今日は施設の先生の好意で、児童みなでお好み焼きを食べに行ったのだが、

千裕は無然として鉄板に生地を延ばしながら、しみじみと呟いたのだった。

「D組のさあ」

「うん?!」

完全に生地に集中していた由真は、不意に話しかけられてドキッとした。

「浦野康人って知ってる?」

「え・・・ああ、千裕の好きな人?」

「そう」

千裕はヘラを皿に置き、目を伏せたまま言った

「どうしたの?ふられた?」

「・・・」

「告白したんだ?」

「してないよ」

「あれ？じゃ、なんで？？」

「彼女居たっぽい」

「えーっ！！マジでか！」

「あの人カッコイイからねえ、とうっかり言いそうになったが、止めた。」

「・・・さいあく」

こういう時に何と慰めたらいいのか。

ピンとこなかったが、由真はとりあえずよく聞く言葉を使うことにした。

ふつくと盛り上がった生地をへらで裏返す。
いい色に焼けていた。

「まあ、しょうがないよ。他にもいい男子はいっぱい居るじゃん」

「えー・・・たとえばあ？」

「えっ。例えば・・・千裕さあ、男子の友達も多いんでしょ？高宮くんとか」

「高宮チビじゃん！！あいつ身長いまだに154センチなんだよ！！」

「うーん・・・じゃあミツチーって人は？会ったことないけど」

「あいつも無理。なんかオカマっぽいし」

「そうなの？」

「由真どうなの？誰か居るの？？」

「ええっ?!」

急に水を向けられた由真は返答に困った。

視線が鉄板に戻り、頭がフル回転し始めた。

好きな人なら、いた。

お母さんとお父さんが離婚する前に、私がいた居た小学校に。
転校して、たぶん忘れられちゃったけど。

でもそんなの千裕に話しても、もう昔の話だしなあ・・・

第一、今はそんな事より”いかに普通の女の子と変わりなく生きられるか”

という雲を掴むようなテーマを追求しなければならなかった。

親からまともな教育を受けなかった分、自分自身がしっかりしなければならぬ。

チャラチャラした男なんて嫌いだし。

でも、そんな事言っただけで独身のままオバサンになるのはもっと嫌だな。

・
愛する人と結婚して、まともな家庭を築くなんて、そんなドラマみたいなことあるのかしら。

「焼けてるよ由真。食べようよ」

「・・・ああ！そうだね」

空腹も手伝って、千裕の悩みも雲散霧消したようだった。

由真も考えるのを止めて、ひたすら食べることにした。

春休みが明けて三年生になったら、イヤでも将来のことは考えなければならぬ。

だったら今はやりたい事をやるべきだと由真は思った。

宿題も無いし、お母さんも居ない。こんな素敵な環境、二度と無いかも知れないんだから。

・・・由真のこれまでの人生で一番楽しい春休みは、あつという間に過ぎて行き、

四月の初頭、目前に迫った始業式をまちわびて市の支給品の制服をハンガーに掛けた。

千春にもらったヘアピンも胸ポケットに入れた。

” いいひと” が見つかった時のために。

第二話 始業式

四月八日、木曜日。

桜が咲き乱れる”くすのき厚生館”の中庭は、降り注ぐ太陽光で眩しいほどだった。

カーテンを開け放して眠っていたようで、由真は

東向きの窓から容赦ない日差しを受けて否応なく目覚めた。

上のベッドで眠っていた筈の歩美は、どうやらとつくに朝食を食べに行っていたようだった。

「由真？なにそれ眼の下。クマ??」

すでに制服を着てメイクの途中だった千裕は、目が合うなり眉をひそめた。

「うそっ」

「嘘じゃねーよ。見てごらん、ほら」

千裕からスタンドミラーを受け取って覗き込む。
なるほど、隈もあるしちょっと充血している。
鏡を返してありがとっ、と言った。

「寝れなかった」

「遠足かよ！！ファンデ貸そうか？」

「ほんと？お願い」

「マスカラは？」

「いらないよ！遊ばないでよ？」

その後もチークは、アイシャドウは、と面白がって勧める千裕に断固断り続けるうちに、

安倍先生が二人を急かしに来た。

急いで制服に着替えた由真は朝食代わりにおにぎりを持たされ、むしゃむしゃと頬張りながら

千裕とともに学校へ向かった。こんなにも、朝は平和だったのか。

汗ばむほどの陽気にすっかり心躍らされた由真は、走り出したい気持ちを抑えつつ校門を通り

抜け、下駄箱に貼り出されたクラス編成表を見に行った。
かなりの人混みだった。

「キミ、転校生の子でしょ？」

急に、隣にいたツインテールの女の子が由真に声を掛けた
左胸に着けられた名札には”二矢内”とある。目鼻立ちのはっきり
した、美少女だ。

「そう。水澤由真」

「あんま喋んなそうだよね？」

「え？そう？？」

自分に関してそんなイメージがあるとは、初耳だった。
今は眠気と緊張で、気配りする余裕が無いだけだ。

「ねーねー、なんで髪伸ばしてるの？暗く見えちゃうよお」

「え・・・な、なんとなくかな・・・」

「詩織、一緒のクラスだよ！D組！ゴムで縛ってあげるから行こう
よ！...」

そう言うと、天然そうな二矢内（ふたやうち？）さんは有無を言わ
さず由真の手を引っ張って

校舎二階の3年D組へツカツカと歩いた。
しまった、千裕置いて来ちゃった。

教室に着くと、その天然美少女は黒板側のドアを勢いよく開け、意気揚々と由真を近くの空いている席に座らせた。
ざわめいていた教室が一瞬静まり、生徒たちが遠巻きにこちらを見つめていた。

物珍しそうな視線が由真にたつぷりと注がれる。

緊張で全身がふわふわしてきた。

すかさず、この状況を察した？二矢内さんが不満そうに言った。

「なんだよー皆！詩織のこと見るなよー」

由真は思わず吹き出し、それと同時に教室の空気は少し和んだ。
男子数人が、お前じゃねーよ！とツツコミを入れた。
窓辺で固まって話していた女子たちが、こっちへ来た。

「二矢内^{ふたやない}、もう仲良しになったの？」

「水澤さんでしょ？どっから来たの？」

「千裕と仲良いんだって？」

まるでマンガみたいだ。

典型的な転校生への質問攻めに、由真は心の底から善意の興味をうれしく思った。

少し前まで、独りで生きてる気になっていたのに。私、ちょっと単純かもしれない。

ともかく、クラスメイトがいい人ばかりで良かった。

——由真は完全に浮かれていた。
いつ何時でも、自分の味方だけが周りにいる筈がない事を、由真は忘れていた。

不意に、伸ばしていた脚に　トンッ　と衝撃が伝わった。

ドアの前の席だったので、邪魔だったかも知れない。

教室に入って来た天然パーマの男子（名札には里峰とあった）が、ちらりとこつちを見た。

ガツツリと目が合ってしまった、由真が謝ろうとした時に、先に男子が口を開いた。

「転校生？」

「あ、うん水澤・・・」

「興味ねえよ。気持ちわりい」

二矢内とその他の女子達は、一斉に目を丸くした。

天然パーマは、女子達の非難の視線をむしろ得意そうに受けつつ、満足気に

ここから一番遠い席に座った。

その声音は、好きな女子をからかう時に使われるような歓迎の気持ちではなく、

明らかに言葉通りの気持ちから発せられたようだった。

由真は自分自身がゴキブリか何かになった様な気がした。

何なの?! 話しかけたのはそっちのくせに!! 石にでも躓いたと思えばいいじゃん!

好きになった訳でも、告白した訳でもない(しかもそんなにカッコ良くもない)男子に、

筋合いも無いのに過剰に嫌われるほど不愉快なことはない。

千裕風に言っなら、こうだ。

お前が言っな!!! 気持悪い!

由真は心中で激昂していた。

必死にフォローする女の子たちの言葉も焼け石に水だ。

一方で、自分の容姿への自信のなさが何より情けなかった。

注目するほど不細工でもないが、真後ろに立つ二矢内に比べたらそりゃあ・・・

考えるうちに、怒りがしゅるしゅると消えてく。

周りを見渡せば、ほとんどの生徒が席に着いていた。

始業のチャイムが鳴る。

「じゃあ、後でね」

「ホントに気にしちゃダメだよ」

「じゃーねー由真あ。ゴム、取るなよー」

皆もそれぞれ適当な席に着く。

今日、帰ったら千裕に眉整えてもらおう。

そう思って、一応この事に関してはケリを付けた。

第三話 音楽室

由真は最近一人の男子が気になっていた。

一昨日の、あの時からずっと。

始業式の日、千裕に眉を整えてもらってから、由真にようやく年頃の女の子としての意識が生まれた。

自分で言うのも何だけど、けっこう身綺麗になったと思うわ。少なくとも、あの天パーに文句を言われない程度には！！

ちよつとだけ自信を取り戻した由真はつまり、ひとりの女の子として気になっているのである。その男子が。

桜井 満晴 はなづか みはる

ちよつと背の高い、色白の男の子だ。

茶色の猫っ毛に、茶色の瞳。優しそうな、くりつとした二重瞼。

・・それらの要素をもつてしても何故か彼は女子に人気がなく、いつも憂鬱そうな顔をしていた。

周りに漂う雰囲気も、どこことなく地味で暗い。

かく言う由真も、音楽の授業まで全く彼の存在に気付かなかったのである。

そう、彼がピアノを弾くまで。

——二日前、クラスの離れてしまった千裕にアドバイスを受けた。

「イケメンを捕まえたかったら、おしゃべりになりなよ。いっくら可愛くても暗いとモテないよ」

イケメンはともかく、友達が多いに越したことはない。

どうやら自分は無口なほうであると気付いた由真は、できる限り喋るようにした。

女子とのお喋りに参加しなければ、お高くとまっていると思われるのも仕方ない。

あの日からすっかり気に入られた詩織は良いとして、このクラスにもお決まりの”女子集団”

というものが在った。

その子たちに万一目をつけられたら、堪ったものではない。

そう思っているにも拘らず、一時間目が終わると同時に由真は

つい、さつさと次の教室へ向かってしまった。

束の間の”ひとりきり”を満喫したかったのかも知れない。

一番前の長机に、リコーダーと教科書を置く。

ふと見ると、ピアノの鍵盤の鍵が開いている。

もしも弾けたら、勝手に弾かせてもらっただけ。

生憎、無教養で育った由真に弾ける曲など”猫ふんじやった”くらいだった。

譜面立てには”summer”と走り書きされた、わら半紙がある。タイトルの下に五線たちには目の回るような数の音符が鉛筆で書か

れていた。

ふーん、先生のかな。 と、それらを知った様な手つきでパラパラと捲った。

すぐに飽きて席に戻ろうとした由真は、一人の男子生徒がすぐ傍に立っているのに
やっと気がついた。

「わあっ」

思わず、驚いて声を上げた。

少年もびつくりしたように大げさに口を開け、目を見開いた。
先日の失礼な天パーとは、どうやら違う人種のような。
おどけた様に首を傾げ、少年は尋ねた。

「何してるの？何か弾くの？」

「いやいや、弾けない！弾けない！」

「授業前のピアノ（ここ）は、僕の特等席だよ」

「それは・・・失礼」

何だかやけに品の良い男の子だ。いい所のお坊ちゃんなのだろうか？
さっさと席に戻り、やることも無いので教科書を開く。
ちらほらと人も増えてきたが、少年は構わずピアノを弾き始めた。

あ、聞いたことある。映画か何かの曲だっけ。

顔を上げて、どんな顔で弾いているのか見たくなった。

真剣その物という感じで、由真の視線も気にならないようだった。

ふと、音がはずれた

あら、と思って教科書に目を戻そうとした時、一瞬だけ目が合った。

照れ笑いしていた。

由真も”にやり”として答えた。

自分の演奏を聴く由真の存在を、認めてくれたようだった。
きまり悪そうに譜面を束ね、立ち上がるといちばん窓際の席に着いた。

ほんの些細なことだっただろう。

けれど、由真の心にはこのとき確かに種が蒔かれた。

純粹に嬉しかったのだ。

普通に接してくれる男子に、久しぶりに出会ったのだから。

だから恋ではないのよ、きつとね。

誰が聞いている訳でもないのに、その日は、施設に帰ってからもず

っ
と
そ
う
思
っ
て
い
た
の
だ
っ
た
。

第四話 輝く少女

仲良くなりたい。

でも、馴れ馴れしい奴と思われたくない。

ぐずぐずと、悶々と、ミチハルを見つめ続けて気が付けば六月になつていた。

最初の期末テストの前。ここ最近降り続けた雨も止み、グラウンドも乾き始めている。

三年生のみを集めた蒸し暑い体育館で、進路指導の和久井先生は額に汗を滲ませて

生徒に進学の重要さを説いていた。

薄い夏服のスカート生地が、汗ばんだ由真の太腿に張り付く。今日は真夏日らしい。

あれから一言も喋っていない。

あの日、あんなに人懐こく話をしていたのにミチハルは、用があるとき以外相変わらず物憂げな表情で譜面をさらっていた。

それからというものの由真はどうすれば良いのか本気で悩んでいた訳だが、五月の始めに朗報が舞い込んできた。

修学旅行

意識して近くにいれば、きつと話しかけるチャンスぐらいある筈だった。

きつと思春期の学校行事は、その為に在るに違いない。

「由真、由真！」

背の順に並ぶとすぐ後ろにいる詩織が、小声で話しかけてきた。

「何？」

「耳貸してよ」

「??」

『・・・由真はミチハルが好きなの?』

由真の心臓が跳ね上がった。

「ち・・・違うよ！何で？！誰から聞いたの？」

「だって由真、さっきからチラチラ、チラチラ、ずーっと見てるんだもん。わかるよ」

「そんな事ないよ・・・」

自分の顔が赤くなっているのが判る。

頭がくらくらして、その場に座り込んでしまいたくなった。

「タイプじゃないし・・・私、背の高い人苦手だし」

「ふん」

ニヤニヤしながら、詩織は何度も頷いた。こちらの心情はお見通しのようだ。

「由真、なつちゃんと詩織で班組もうよ」

「え・・・？修学旅行の？千裕も良い？」

「いいよ。じゃあ、あと二人はミチハルとたかみーで」

「え・・・っ」

「二矢内！！ 水澤！！ お喋りの時間じゃ無いのよ！！！！」

担任の坂内先生ばんないの怒号が体育館に響いた。

三年生全員がこちらを向く。・・もちろん、ミチハルも。

完全に恐縮した由真とは対照的に、詩織は相変わらずニヤニヤしながら

「ごめんなさい」

と、坂内先生に向き直った。

皆の緊張が一気に解けて、くすくすと笑い声が聞こえる。

壇上の和久井先生までもが、笑いながら話を続けた。

詩織のようにになりたい。

由真はその時、初めて同年代の女の子に尊敬の念を抱いたのだった。詩織にいつも無理やりさせられているお下げ髪も、誇らしく感じた。そして、何より感謝した。

こんなにも簡単に、ミチハルが笑いかけてくれるなんて。

たった数秒だった。

斜め後ろ、由真から見て五人うしろに居たミチハルと目が合った。まるで保護者のように柔らかく微笑み、”静かに”と云うように人差し指を唇にそつと当てた。

笑って、直ぐに由真は前を向いた。

——今日はぐっすり眠れそうだ。・・いや、眠れないかも。

どちらにしろ、とても幸福な時間であった。

第五話 買い物

「やっぱりね。どうりで最近痩せたと思ったんだよ」

修学旅行が二日後に迫った土曜日、やっと由真は千裕に口を割った。梅雨の晴れ間が清々しく、絶好の買い物日和だ。

今朝安倍先生から貰ったお小遣いをそれぞれの財布に入れ、二人は市街地へ出て来た。

「ピアノとか弾いてる時、カッコ良くてさ」

あまりに俗っぽい惚れ方でかつこ悪かったが、感じたままを告げた。勿論、教室で一人にいるときの物憂げな横顔も、他クラスの友達とマンガを読んでいる時も、

あの穏やかな笑顔も、由真は全部好きになっていたけど。

「えー・・アタシはやだなあ。なんかオカマっぽくて」

「オカマじゃないよ!! ちょっと上品すぎるだけだもん」

「由真のタイプは解らんなあ。ま、頑張りなよ。ライバル居ないだらうし」

そっけなく、千裕が言う。

由真はと言うと、こうして街を歩きながらも、根拠のない期待に胸を躍らせていた。

もしかして、ここのマックに居るかもとか、

本屋に楽譜を見に来ているかもとか。

校区内の市街地なので当たらずも遠からずなのだが、ふわふわとわき見していると千裕にからかわれそうなので、止めた。

「どんなの着て行くの？」

駅ビル内のショップを慣れた足取りで進む千裕は、なんだかいつかテレビで見たショップ店員のものまねをする女芸人みたいだった。

「千裕、ここで服買うの？ギャル服じゃん」

「ギャルじゃねーよ。つか由真の服の趣味知らないんだけど。どんなの？」

「んゝ・・・」

幾つも連なるショップを見廻し、一体のマネキンが由真の目に留まった。

「あんなの」

特に何も考えず、由真は指差した。

夏らしい白のレース付きワンピースに、丈の短い半袖デニムを羽織ったスタイル。

自分には少し可愛すぎるかも、と指差してから思った。

「へえ、良いんじゃない？由真らしいよ。でもさ、せっかく痩せたのに膝丈でいいの？」

「ミニなんか履けないよ！先生に怒られそうだし」

「先生なんて気にすんなよー。ミチハル、ミニ好きかもよ」

「そんな訳ない！多分奥手だもん！！」

「じゃあ初えっちは頂きだ。キスもまだかも」

「ま・・まだしないよ！まともに喋ったことも無いのに・・」

キスだのエッチだのと千裕に言われると、ミチハルが急に近い存在に感じた。

そんな事が出来るような事柄になれる日が来るのだろうか？

― 小学校の時の初恋の男の子のように、いつか諦めなければならぬ
い時が来るかも知れない。

そうしたら私は、またあの日のように泣くのだろうか。

あの子どうしてるだろう、って思い出して、懐かしくなるのだろうか・・

そう思うと由真は、自分のしている事がまた無意味になる気がして
悲しくなった。

小さい頃は何時もそうだった。

いつだったか、母の日に学校で作ったクッキーも、持ち帰った途端母にトイレに流されてしまった。卵や小麦粉を勝手に持って行ったから、いつもより殴られた気がする。

ああ、工作もそうだった。

宿題なんて、家に帰ったらやる時間なかったなあ・・・。

追憶のように、あれこれと嫌な事を思い出していた。全てが母のせいだとは言いたくないが、

少なくとも、時に物事に対して突然やる気が湧かなくなるのは、あの日々の後遺症のようなものだった。

何かに熱中する度に、誰かに壊されるような気がしてならないのだ。今でも・・・。

「やっぱり、どれでもいいや」

と千裕に話しかけたつもりが、すでに千裕が居ない。

面食らって周囲を見渡すと、千裕はビニール袋を提げて戻ってきた。さっきのセリフは独り言だ。と言いつつ聞かせ、ビニール袋の中をのぞき込んだ。

「何にしたの？」

「ポテチ大人買いして来ちゃった。うす塩とか、コンソメとか。新幹線の中で食おうぜ！」

究極の快樂主義である千裕は、今は色気より食い気らしかった。

「服は?!」

「買いたい物買えばいいじゃん!服なんてあるもの着るよ、アタシ。由真まだ悩んでたの?それ買いなよ。欲しいんでしょ?」

由真の頭が、急に軽くなった。

「あ、うん。買って来る」

「ついでに下着も新調すれば?」

「しないっつの!!」

照れ隠しに、吐き捨てるように言ってレジへ向かった。

多分、千裕の方が大人だ。

今はもう安全な所に居るし、自分の物もキッチンとあるんだから…。由真の心に晴れ間が戻り、その服は明後日まで大事に取って置くことになった。

帰りに買ったマックスエイクを飲み終わる頃には、

二人ともその日にあった事など忘れてしまったのだけれど。

第六話 改札口にて

——午前7時36分

JR豊橋駅は、西部中学校の三年生がジャックしているようだ。

30分前に施設を出た千裕と由真は早速コンソメ味のポテトチップスを一袋開け、駅に着くころにはすっかりお腹いっぱいになっていた。

と、集合場所の在来線改札口に、見慣れたツインテールの美少女が居た。

空色のカッターシャツにデニムのパンツ、腕にはシルバーアクセサリーを付けている。まるで出張に行くキャリアウーマンだ。旅行用のキャリアバッグも、シンプルでかっこいい。

「由真ー。千裕おー」

「おはよー」

「よーっす！つかOLじゃね？！」

「いいでしょ。由真もかわいいじゃん」

詩織くらいの美少女に可愛いと言われると、それだけで自信が沸くものだ。

今日は自分で髪をお下げにしてきた。

「マジで？昨日千裕と買いに行ったんだ」

「えゝ！気合入ってるなあ由真」

ふと気になって、由真は内緒話のように声をひそめた。
落ち着きなくきよるきよるとそのへんを見回す。

「・・・ミチハル、もう来てる？」

「居るよ。ホラ」

詩織の指さす方向に、デザイナーズＴシャツをラフにきた爽やかな少年が居た。

スタイルの良さ故なのか、Ｔシャツにデニムというありふれた格好でも妙にお洒落である。

千裕がミチハルを一目見るなり、ふーんと呟いた。

「ミッチー、いつもより普通じゃねえ？」

「そうでしょ。制服よりこっちの方がもてそうじゃない？」

「あハハッ！！っつーか高宮小学生じゃん！」

「たかみーはしょうがないよ。小っちゃいし」

ミチハルと喋っていた“たかみー”らしき男の子は、どうやら詩織たちの声が聞こえたようであるところを向いた。

なるほど、背の高いミチハルと並ぶと小学生みたいだ。
たかみーは不満顔になり、わざと足を鳴らしてどしどしと向かってきた。

——ミチハルと一緒に。

「おい！ふざけんなよ！！ミチハルがデカイだけなんだよ！」

はいはい、と詩織たちが流す。

由真とミチハルの距離は、わずか１メートル程だ。こんなに近くに立っているのは初めてかもしれない。

「ねえ、水澤由真」

柔らかな声音が、右隣から聞こえた。

由真はどきりとして体ごと右を向く。

りがして、胸が高鳴った。

ふわり とミントガムの香

「こないだ坂内先生に怒られてたでしょ。詩織と」

「うるさいなあ」

”由真”でいいよ、と言わなくてもミチハルはそう呼んだ。

「うるさかったのは由真の方だよ。面白かったけど」

「面白かった？・・・えっ！！？」

由真の顔が一瞬凍りついたのち、頬が物凄い速さで熱くなっていっ

た。

赤面しているのが、自分でも判る。

「みつ・・・ミチハル何話してたか聞こえたの?!」

昂ぶってしまい、語尾が震えたようだった。

由真のタダならぬ狼狽ぶりに、ミチハルは驚いて数秒真顔になった。詩織たちもポカンと口をあけて、由真を見ている。

何やら重い沈黙が10秒程あっただろうか。

ミチハルは由真を真剣に見つめたまま口を開いた。

「・・・なんで僕の名前知ってんの？」

ミチハルはどうやら天然だということを、皆が悟った。遅れて、由真の頭にも言葉が戻ってきた。

「・・・・・・・・・・なふだ・・・とか・・・え??」

「あーーーーー!なるほど!」

可笑しくて、由真は何となく笑った。

間もなく先生の号令が掛かり、詩織が一応班長らしい行動をとった。

「あ、行くぞみんな。整列だつて」

「ういーす。行くよ由真、天然ミッチー」

「天然じゃない!」

様々な思いが駆け巡る中、由真は今ミチハルと交わしたセリフを思い返していた。

―変な奴だと思われたかなあ、急に慌てて。

・でも、ミチハルだって変だし。変と言うか、天然だし。
大丈夫だよ、きっと。

まだ宙に浮いているような気持で、由真はひたすら自問自答していた。

でも、あの日の音楽室で感じたミチハルへの親近感のようなものは、やっぱり嘘じゃない。

・・・それは確信できた。

それから間もなく、新幹線ひかり460号は東京駅へ出発したのだった。

第七話 誤解

なっちゃん（宮間奈津^{みやまなつ}）はバレーボール部の部長で、身長がミチハルと同じくらい高いサバサバした女の子だ。

顔は十人並みで可もなく不可もなくといった感じなのだが、モデル並みに細身で

概ね店で売っている服は何でも似合うようだ。

デザイン性の高いロングTシャツに、レギンス。本当にモデルみたいだ。

転校当初の人見知りも無くなり、なおかつ体育の時のファインプレーの連続に

ちよつと憧れを抱いていた由真は、そのなっちゃんに珍しく自分から話しかけた。

「隣だね。よろしく、なっちゃん」

努めて明るく、でもくだけ過ぎないように慎重に言葉を選んだ。

——つもりだったのだが、

なっちゃんは由真と目を合わさずに窓の外を眺めていた。聞こえなかったのかも知れない。背中を、冷や汗が伝う。

宙に浮いた言葉をどこかへ追い払いたくて、座席に腰を下ろしながらもう一度言った。

「よろしく。良かったね、今日晴れ・・・」

言い終わる前になっちゃんはすくつと立ち上がり、

顔をしかめて大きくため息を吐いたかと思うと長い足で由真の膝をまたいで向こうの女子集団の方へ行ってしまった。

香水のような甘く濃い匂いが、鼻のあたりにいつまでも漂っていた。何も悪い事をした覚えはない。

確かに今まで廊下ですれ違っても挨拶なんてしなかったが、それだけで腹を立てるほどお互い仲良くも無い筈だ。じゃあ、どうして？
なんで？？

たった今へし折られた好奇心に代わって、耐え難い心細さが全身に染み渡った。

もしや、いやはや、これは・・

”ハブ”られた・・・？

由真はじぶんの脳細胞を総動員して理由を挙げてみた。

ギャルの千裕と仲が良いから？

それとも、おそらく3年生で一番美人な詩織に気に入られたから？

単に私が暗そうだから？？

それとも・・・いや、キリがない。

全部推測に過ぎないのだ。もしかしたらイヤホンつけてたのかもしれないし。

超高性能、ワイヤレスで無色透明の装着している事を誰にも悟られない逸品。

——— なんだか、コンソメの良い匂いがしてきた。

「ポテチ食っ？」

声を掛けられ後ろを見ると、千裕が座っていた。隣には同じ班の高宮がふんぞり返って座っている。

差し出された袋からポテチを数枚取り、手の平にとっておいた。

「千裕」

ちよつと不満げな声で、由真は続けた。

「なっちゃんって、どんな子？私何かしたっけ？？」

千裕は皆まで聞かずに やっぱりね、 という顔をした。

同じく高宮も、うんざりしたような顔でポテチをばりばりと頬張っていた。

答えを求めるような表情で、千裕を見つめる。

「あの子さ」

千裕が言いかけると、高宮が割って入った。

「他の奴には言うなよ。俺まで困った事になるしよ」

勿論と言うように、由真は何度も無言で頷いた。

千裕が小声で続けた。

「あの子、高宮が好きみたいでさ」

もう一度頷く。

「まあ、そんなの誰でも知ってるんだけど。高宮も知ってるし」

「ああ、それで詩織は・・・」

「うん、まあ・・・仕方ないんだけどね。ミチハル入れるとなると高宮も入れなきゃ不自然だし、高宮誘うとなると、なっちゃんも入れないとヒス起こされるし」

高宮が一瞬、千裕に何か訊きたそうな顔をしたが、しかし黙っていた。

由真の方は、質問した。

「でも私関係ないよ？」

高宮には気の毒な話だし、想いの報われないなっちゃんも憐れと言えは憐れだが、無視をされる筋合いはない。
しかし高宮は全ての謎が解けた様で、目を見開いて由真に言い放った。

「お前・・・そうなの??！」

——ミチハルの方か!!マジかよ!そっちか!それで詩織は・・・」

高宮に悟られて耳まで真っ赤になりながら、そのセリフで由真も全ての状況を把握した。

ミチハルと高宮、どちらが女子に人気かと言ったら高宮の方だ。
詩織と千裕は元々高宮に興味は無く、それはなっちゃんも分かっていた様だ。

しかし詩織は何故か高宮を誘った。それはきつと水澤由真が高宮を・・・
・・・なるほど、凄い分析だ。強引な気もするけど。

「由真・・・どうするよ」

無い眉を八の字に曲げて千裕は問いかけた。
さて、どうしたものか。

第八話 激昂

新幹線がトンネルに入ると、周囲がざわついた。

そんな事初めてでもないのに、耳鳴りがするとテンションが上がるのは修学旅行だからか。

3-Dの女子集団も、きゃあきゃあと盛り上がった。なっちゃんの姿は、もう見えない。

災難の由真は、素朴な疑問を高宮にぶつけた。

「告られたんだよね？」

普通に考えれば、それだけ自己主張の強い好意の抱き方ならばはっきりと言葉に出さなくても告白と捉えられるが。ともかく、高宮は頷いた。

「1年の秋にな。それからだ、酷いのは。」

「でも、細くて綺麗だよ。だめ？なっちゃん」

「たかみー、自分より背の高い女は嫌なんじゃねーの？」

不機嫌になつて否定するかと思いきや、しんと黙ってしまった。

高宮が蠟人形のように固まる。瞳は真剣その物で、何か口にするのを躊躇しているようだ。千裕と由真の目に、何かを期待するようなギラリとした光が宿る。

時が止まったように、2人は黙ったまま見つめていたが、短気を起こした千裕が遂に促した。

「ねえ、どうなの」

まるつきりロダンの考える人になっていた高宮は被っていた野球帽をさらに目深にしてゆっくりと立ち上がった。一呼吸置いて、声変り中の独特な声で

「便所」

と短く言い残して、そそくさと車両の結合部へ続くドアの向こうへと消えてしまった。

表現しがたい可笑しさを、ふたりは密かに共有してニタニタと見送った。

車内スピーカーから、車掌の気だるそうなアナウンスが流れる。

——間もなく新横浜です。お出口は左側です。この列車はひかり460号、東京行きです・・・

由真がはっとする。

「富士山見るの忘れてた」

「あ・・・アタシも」

にわかに呑気な雰囲気になり、自然と解決策も出た。

とにかく詩織に伝えてもらおう。高宮は別に好きじゃないって。きつとそれさえ伝われば悪い子じゃない。そう思うことにした。

「たかみー、多分好きな女子居るよね」

「すぐ判るよ」

「三角関係だぜ？昼ドラじゃね？」

肩を震わせて笑っていると、長身の女の子がツカツカと歩み寄ってきた。

荷物を取りに来たのだろう、なっちゃんは仏頂面のまま背伸びをすることもなく荷物棚の小物バッグを降ろした。そのまま行ってしまうと思いきや、吊り目気味の一重まぶたをカッと開いて千裕を見た。突然睨まれ、あの千裕ですらちょっと身じろぎした。

「ねえ」

驚くほど冷やかな声だった。

「千裕にも言っておくけど、この子最低だから！あんまり喋ってる
と後悔することになるわ！忠告しておくからね！キチガイよこの子
！！私を貶めようとしてるの！！！」

段々語勢が強くなり、最後の方など半ば絶叫していた。12号車の生徒全員が驚いてなっちゃんを見る。ミチハルは他の車両に居るようだ。よかった・・・。

般若のような形相でそれだけ言うと、なっちゃんは踵を返して戻ろうとした。

と、由真のすぐ後ろでもう一つ。

——女のヤクザがいたらそんな感じだろう。いやにドスの利いた声が、由真の背中を越えてなっちゃんの後ろ姿を捕らえた。

「オイ！！てめえ！キチガイだと？！！差別用語だろうが！！謝れ
ブサイク！！」

言いながらポテチの袋を床に叩きつけて千裕がなっちゃんに掴みか

かった。言葉遣が荒いのは毎度の事だが、それにしても千裕はどちらかと言えば温厚というか、ともかくそんなに怒る方じゃない。その千裕が、今にも殴り掛らんばかりの剣幕でぶちギレている。

「はぁ？」

なっちゃんも負けじと高い所から見下ろすように千裕を睨みつける。女子集団がオロオロして彼女を止めに来たが、しかし振り払われた。数人が脱兎のように他の車両へ駆けだす。先生を呼びに行ったのだろう。

「由真に謝れつつってんだよ！たかみーだって迷惑してんだ！！いつまでも付き纏いやがって！」

12号車全体に（由真も含め）”オイオイやめてくれよ”という空気が漂う。

運悪く隣の車両結合部にいたミチハルと高宮が、何事かと覗きに来てしまった。

コレ何ていう昼ドラマ？

高宮が一瞬で揉め事の原因を察し、来るんじゃないかという顔で俯いた。

ミチハルの方は何が何だか分からないようで、掴み合う二人と高宮を交互に見つめている。

ミチハル以外の全員が修羅場を予想したが、隣の11号車から先生達がバタバタと飛んで来た。

蛇とマンゲースのように睨み合う千裕となっちゃんを引きはがすと、坂内先生は事情を訊くために二人を11号車に連行した。気が付くと高宮は居なかった。どさくさ紛れに何処かへ行ってしまったのだ。ミチハルは？一緒に何処かへ消えたのだろうか。

いや、由真の真後ろに立っていた。

「隣いい？」

ミチハルの思いがけない問いかけに由真は二つ返事で頷く。
生徒たちは皆、落着きを取り戻していた。

第九話 進展？

由真はまだ混乱していた。

せつかくミチハルが隣に座っているというのに、頭の中はなっちゃん言葉で一杯だった。

新幹線が新横浜を発しても石のように黙っている由真を尻目に、ミチハルはバインダー（何故かいつも持ってるんだミチハルは）を手に取り、楽譜を眺め始めた。

ずっと、由真は考えていた。”キチガイ”という言葉について。

幼い頃から自分はその”キチガイ”だと母に教わってきた。

頭のおかしい子。人間のクズで、生きる価値が無い奴。

その言葉に洗脳されて、一度本気で死のうとした事があった。

・・・隣のおばさんに止められて、結局またお母さんにボコボコにされたなあ。

死ねって言ったり、そうかと思えば私を殺人犯にするなど言ったり、今思うと言ってることが無茶苦茶だった。そんな事にも気付かなかった。どうかしてたのかも知れない。やっぱり。

千裕の反応は早かったな。千裕は一体どこでそんな言葉を知ったのだろうか？

やはり私と同じように母親に言われたのだろうか？

じゃあ、なっちゃんは何処で？

いや、何処で知っていようと問題無い。マズイのはそれをやたらと口にする事だ。

でも私は千裕と出会えた事を良かったと思うけど、二人ともまともな家庭で幸せに暮らしていたら恐らく出会うことは無かっただろう。詩織にも会えなかっただろうし、ミチハルの事も知らないままだった筈だ。

うーん……。救われた今だから冷静に考えられるが、私がどちら側の人間であるにしろ今は前に比べて幸せだし、自分の頭が心配ならばカウンセリングを受けさせてもらえばいい。

ただ、生きる価値があるかどうかは、そもそも何に対しての価値が分らないし人類皆何かの貨幣になるために生まれた訳じゃ無いと思う。

親の愛は本来無償である筈だし、金が絡むような愛なんて大人になつてからだって沢山だ。

クラブ、テレクラ、夜の街。そんな所にはもう死んでも連れて行かれたくないし、

もしも私に娘や息子が出来たらそんな所へは連れて行かないに決まっている。

自分と同じ道を歩ませたくは無い……。その為に私はいたってまともな人間でなければならぬ。

——あれ？何考えてたんだっけ？話が逸れてきた。

思考の呪縛から解放されて、ふと由真はすぐ右のミチハルを見た。相変わらずわら半紙プリントの楽譜を眺めている。

いや、違う。ミチハルの視線は、良く見ると楽譜に焦点が合っていない。

まるで持っているプリントや前にある座席が透明になって、新幹線のリノリウム張りの床を直接見ているようだった。

もしかして、単にぼーっとしているだけかも知れない。一瞬迷ったが、由真は話し掛けた。

「ミチハル、高宮君どこ行つたの？」

突然話し掛けられて特に驚いた様子もなく、由真をちらりと見て微笑んだ。

悪戯っぽい、由真の一番好きな表情だった。

「さあ・・・？なんか困った事が有ったみたいだね？」

「ミチハル本当に知らないの？嘘だよね？」

「何を？宮間と佑介（高宮）の事？？」

「何だ。やっぱり知ってるんじゃない？」

「わからないよ。千裕は何をしたの？何で佑介がヤバいの？？」

ミチハルはどうやら本当に分からない様子で由真に問い詰めた。

「ああ・・・そうか。ミチハル途中から見たからね」

「千裕があんなに怒ってるの、久しぶりに見たよ」

彼の口ぶりからすると、千裕とは長い仲なのだろう。ミチハルと言
い、私と言い、千裕には何故か地味な友達も多いのだ。単に人脈が
広いだけかも知れないが。

「でも逆に訊くけど、なっちゃんが高宮君の事以外であんなに怒つ
たりするの？」

「するよそりゃあ」

涼しい顔で即答された。

「宮間ってさ、スタイル良いでしょ。多分それだから余計に・・・

何て言うか自分に自信が有るんだよね。きつと」

由真が ああ、と相槌を打つ。その自信がもう少し控え目ならば、きつとモテるのだろうけど。

「でさ、まあ・・・僕、最初由真が何か言われたのかと思ったんだ。そしたら違ったみたい」

由真の目がまん丸になった。

「なんで分かったの？聞こえてた？」

「え？」

「千裕は・・・私を庇って怒ったんだよ。由真に謝れって」

「やっぱりそうだったんだ」

被せるように、由真は慌てて注釈を付けた。
一番誤解されたくない人だから。

「私、別に高宮君の事好きじゃないよ。そう思われちゃったのかも知れないけど・・・」

「わかってるよ。まあ、それも有るだろうけど」

ミチハルは特に気取らず、こう続けた。

「由真が可愛くなったからじゃない？宮間よりも」

録音しておきたかった。今のセリフ。

無論そんな事をしなくても忘れることは無いだろうけど、こんな事をミチハルに言ってもらえるなんて――

「何言っただか。ナンパ野郎め」

照れ隠しに笑ってそう言ったが、妙に声のテンションが上がってしまった。

新幹線は、間もなく東京駅に着くようだ。
荷物を取りに、ミチハルは隣の車両へ行ってしまった。顔のニヤケが、なかなか戻らなかった。

第十話 幸せ

「よーす。由真、大変だったんだって？詩織A組の所にいて知らなかった」

呑気な班長が、東京駅に着いた途端に戻って来た。

しかしセリフとは裏腹に深刻な表情を浮かべている。なっちゃんを誘った事に責任を感じているのだろう。詩織のせいでは全く無いのだが。

「大丈夫。でも千裕が心配」

「さっき二人見たよ。なっちゃん、他の子の班に行ったらしいよ」

「本当に？良かった。失礼だけどさ」

言っているうちに千裕がふくれっ面で合流して来た。右手には二つに折り畳んだ400字詰め原稿用紙が数枚。由真は俄かに申し訳なくなつた。

「ごめんね千裕。それ・・・反省文だよね？」

「あ？由真は全然悪くねーよ。ほんつとム力つく！あのツリ目！！」

先刻よりは大分落ち着いていたものの、地団駄を踏んで怒っていた。千裕の正義感には頭が下がる。人って見かけに依らないものだ、本当に。

「由真、あれから里ちゃんとか喋った？」

「さとちゃん？」

「里峰弘。あの……由真に突っ掛かって来た男子」

詩織が急にそんな事を聞いた。

クラス替え初日の、あの嫌な奴か。天然パーマの。

「ううん。……別に喋りたくもないよ、あんな奴」

「ちょっとは気にしてるみたいだよ。気が向いたら話してあげてよ」

詩織は大抵の同級生と仲が良い。彼女の人徳であろう。なっちゃんですら詩織にだけは口答えしない程だ。

そして、ある意味で権力とも言えるその人気の高さをちつとも鼻に掛けないところが、詩織が詩織たる最大の美点に違いない。

成績に関してはごく平均だが、運動神経も良いし、性格も良い。見た目に関しては、立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花……という古い言い回しがしっくりくる程の申し分ない容姿だ。

どちらかと言えばヒマワリのような気もするけど。

……まあ、それはともかく。

「本当？……わかった。今度喋ってみる」

「そうしてやってよ。……ところで由真たち、お台場は誰と回るの？」

「え？班行動じゃねーの??」

すかさず千裕が口を挟む。

「違うよ。自由行動だったさ」

「私も聞いてない。詩織はどうするの？」

「詩織は彼氏と回る」

臆面もなく詩織は言った。

由真は少しびっくりしたような寂しいような気持ちになったが、当然と言えば当然な気がした。

「由真はミチハルと？」

「・・・そうしたいけど、どっか行っちゃった。千裕と回るよ」

「おう！ミッチーなんてほっとけほっとけ。ついでにA組ウチのクラスの女子も誘おうぜ」

「そつだね！賑やかに行こうか」

「そつか。じゃあウチの班は点呼取ったから行っといでよ」

「うん。じゃ、また後で」

「じゃーなー詩織いー」

その言葉の通り新たに4人加わり、千裕と由真を含め6人でお台場を見学することになった。

千裕と同じ女子テニス部の小柄で陽気な桜井陽子、同じく女テニの

お調子者である清水藍子、ボーイッシュで女子にモテそうな東みなみさん、

そしてA組でも千裕と一番仲が良いよっしー（吉住友里）、なかなか個性のあるメンバーだ。

新幹線の失敗が（由真に原因はないが）頭を過ったが、どうやらこの4人は気さくな女の子で終始くだけた雰囲気であり、由真はすぐに打ち解けた。

すぐにひょうきんな陽子と藍子の二人が張り切って漫才を始め、皆が機関銃のように笑い転げた。息が出来なくなるほど、笑った。

由真は幸福だった。

たくさんの友達、信頼できる人間、大好きな人。

それらは子供時代が終わりに近づくにつれて、もう諦めかけていたものだった。

もうすぐ15になるのに、しかしやっと今になって、初めて由真は思った。

—— 子供のままで居たい。中学の3年間、ずっとここに居たかった……。

いつの間にか水澤由真は、寡黙で大人しい女の子ではなくなった。

よく喋り、よく気の利く利口そうな女子。最近痩せて、ちょっと可愛くなった女子。

お台場見学を終える頃には、そんな言葉がぴったり合う柔らかな笑顔の由真がいた。

—— なんか笑い方ミチハルに似てるな……

千裕は何となくそう思ったが、本人に言うのは止めた。
あまりに幸せそうで、何も言わなくても良い気がしたからだ。

第十一話 告白

ところで由真たち3年生御一行は、銘々の大荷物にタグが付いている。

各自がそれに名前とクラスを書いて、担任にホテルの部屋番号を割り振ってもらう。

配送業者に、各自の部屋に届けてもらう為だ。

そのホテルの部屋は名簿番号順に割り当てられた訳で、（生徒たちに自由に組ませると何かと問題も多いと思われたのだろう）つまり個々の希望通りではないのである。

そう無情に、事務的に、五十音順に部屋が決められた訳で・・・。

16時30分

ホテル日航東京に、西部中学校御中はバスにて到着した。

既にお土産をたくさん買った者も居れば、フジテレビ周辺でひたすら誰かを待ち伏せしていたつわものも居た。

由真たち賑やか集団は、ほぼ半日掛けてパレットタウンを満喫した。

由真はなっちゃんの名などすっかり忘れていたし、下手をすればホテルの部屋割が名簿順だということも忘れていた。

ただただ、夕食のバイキングの事と、ミチハルの事しか考えていなかったのだ。

この広い、西洋の洋館のようなホテルのロビーに名簿番号順に並ばされるまで、由真は全く気付かなかった。

すぐ真後ろに、なっちゃんが居たことに。

後ろを振り返らなくても痛いほどの視線を感じていた。メデューサに睨まれているみたいだ。

心なしか、首筋が石化しているような気がする。石像になりかけながら、由真は小さな望みに縋った。

3人で一部屋の筈だ。

先頭から順に3人で分けているとすると、私の名簿番号が3の倍数ならば丁度なっちゃんと私の間で切れる訳だ。

——と、考えると同時に由真の希望は断たれた。

坂内先生が近づいて来る。

前方から、3人に1人、部屋のカードキーが配られる。

由真の目前で、一つのグループが出来た。ポン、と由真の手の平にカードキーが渡される。

「19、20、21。水澤、宮間、森下ね。はいコレ」

「1216」12階の16号室だ。せめて近くに詩織が居ればと思ったが、番号順でいくとエレベーターを挟んで向こう側の14号室だった。

不幸中の幸いは、森下亜紀が比較的大人しくて個性の弱い女の子という事だ。

地味だけど清楚で、セミロングのつややかな髪を後ろで一つに結んでいる。

文庫本を読むのが好きらしく、気が付くと教室の傍らで読んでいる。そんな女の子なのだ。

何だか彼女も気の毒な気がしたが、流石に面と向かつては言えまい。解散後、渋々という雰囲気丸出しでなっちゃんは付いて来た。亜紀は、ただにつこり笑ってよろしくね、と言った。

おっとりしてて、付き合いやすそうな子だ。ちよっただけ癒された。なっちゃんは部屋に着くなり、大きなバッグを持ってさっさとどこかへ行ってしまった。

当分ここへは戻って来ないつもりだろう。

「由真ちゃん」

不意に、亜紀が不安げな顔をした。

「ん？」

「あの話、違うよね？ なっちゃんが言ってた事。私どうしても信じられなくて・・・」

「あの・・・？ 高宮君の事？！ 全っ然！！！」

思わず、頭が壊れそうなほどブンブンと首を振った。

その直後の亜紀のほっとしたような表情が、全てを由真に悟らせた。

——モテるな・・・高宮君。確かにちよっとジャニーズ顔かも知れないけど。

「そっか・・・大変だね」

何が大変かは、きっと彼女自身が痛感しているだろう。
しかし亜紀はただ静かに微笑んだ。

「ううん嬉しいの。私も佑介の事好きだったから・・・なっちゃんにはゆっくり分かってもらおうって昨日、二人で」

「へ？」

素っ頓狂な声が出てしまった。

もちろん聞き間違いではなかった。

亜紀は真っ白な頬を微かに赤らめて、下を向いた。

「・・・家、向かいだからすぐに会えるの。それで昨日・・・告白されて」

度肝を抜かれた由真は、思わず周りを確認した。この場になっちゃんが居たら、文字通り修羅になってしまう。

ダッシュしてドアの鍵を確認する。念のため、チェーンまで掛けて戻って来た。

「ビックリした・・・全然気付かなかったよ」

「しょうがないよ、由真ちゃん転校したばかりだし。幼稚園からずっと好きだったの」

初々しくて、自然と笑みがこぼれた。

今すぐ亜紀を高宮の所へ連れて行って、皆で盛大に祝いたくなった。高宮の照れながらも嬉しそうな表情が、目に浮かぶようだ。

「大丈夫だよ！きつとなっちゃんも分かってくれて！詩織に相談しよう！！」

ポップコーンが弾けるように立ち上がり、亜紀の手を取った。

亜紀はちよつと驚いたが嬉しそうに、でも落ち着いた声で言った。

「ごめん。まだ皆には言わないで・・・ゆっくりでいいの」

由真はちよつと残念だったけれど、その言葉に納得せざるを得なかった。

「そっか・・・そうだね。でもおめでとう。幸せにね」

何だか結婚式のような言い方になってしまったが、それもめでたさを倍増させて、関係ないのに仲人の様な気分になった。

新婦（亜紀）はお礼を言っていると、頬に手を当ててドアチェーンを外しに行った。

何て告白されたのか、後で訊こう。良いよね？それくらい。

その時は私もミチハルが好きだって言うからさ。

その後も二人は、夕食の時間まで恋の話で盛り上がっていた。互いの事は、いつの間にか呼び捨てになっていた。

第十二話 葡萄（前書き）

本編関係ないです。高宮と亜紀のお話です。

第十二話 葡萄

高宮佑介は、すぐ向かいの森下さん家に向かっていた。

今年の6月は、雨が少ない。

昨日も今日も梅雨入りしたのがウソのように空が青く澄み切っている。時折涼しい風が吹いて、佑介の決意を後押しした。

向かいには幼馴染の女の子が住んでいる。

昔は（と言っても2、3年前だ）互いの家を行き来していたのだが、中学1年の秋の出来事があってから二人とも何となく気まづくなってしまった。

銅板に” MORISHITA ”とローマ字で掘られた、お洒落な表札を目の前に見据える。

英国の田舎町に建っているような、美しく威厳に満ちたレンガ造りの家を改めて眺める。おじさんの趣味の小さな葡萄畑が裏庭に見えた。今は葉ばかりだけど、夏の終わる頃には今年も甘い実が生るはずだ。毎年ウチにも届いていたが、去年だけは亜紀じゃなくおばさんが来た。

今年は・・・どうか亜紀に届けて欲しい。

佑介はぐつと息を止めて呼び鈴を押した。

「・・・ああ、佑ちゃんか。相変わらずチビだな」

ドアが開き、おじさんが悪びれずに言い放った。苦笑いして会釈する。

亜紀の父は、あしながおじさんがそのまま現実に出てきたような、のっばでハンサムな中年男性だ。

年頃の亜紀には最近嫌われているらしいが、実際本人に聞いた訳ではないのでおじさんの思い過ごしかもしれない。

「おじさん、亜紀居る？宿題の事でちょっと」

わざわざ亜紀に何の用事かなんて今まで言った事無かったが、何故か口が勝手にそう動いた。
全身の血がざわめく。

「亜紀なら2階^{っえ}だよ。修学旅行に来て行く服で悩んでるんだ。笑えるだろ」

そう言うのと、にんまり笑って佑介を招き入れた。ドアが閉まり、背後でドアチャイムの美しい音色が響いた。

相変わらずこの家は気持ち良いくらい片付いている。とても女子中学生と小学生の男の子が住んで居ると思えないような生活感の無さだ。絨毯に髪の毛一つ落ちていない。

「母さんが留守で、大したもんは出せんが」

そう言いながら、台所からジュースのペットボトルを2本持って来た。

「亜紀にも持って行ってやれ。菓子は食わせるなよ。最近ちょっと太ったんだ」

おじさんが歯を見せて笑う。
だんだん昔のようなノリが戻って来た佑介は、「冗談を言いながらペットボトルを受け取った。

「それで洋服選び直してんの？どれ着ても変わんないよ」

背中を小突かれながら、ワックスの効いた重厚な木製階段を上る。
一人になった途端、佑介は亜紀（こゝろ）の家は何をしに来たのか思い出して
胸がざわつき始めた。

亜紀の部屋の前に立つ。両手に持ったペットボトルは手が痺れるほど冷たくて、小さな水滴が満遍なく付いていた。

「亜紀」

入るぞ、と言いかけて佑介は黙った。

着替え中だったらヤバいな。

何がヤバいって、俺の気持ちだ。

いやいや気持ちだけじゃない、いろんなものがヤバい。

「・・・佑介？何？？」

驚いたような声が部屋から聞こえた。佑介は余計に緊張してきた。

「服着てるか？入るぞ」

「あ、うん。大丈夫・・・いや、待って！！ちょっと散らかってるの！」

「んなもん良いよ、別に」

亜紀の制止を無視してガチャリと扉を開けた。

品の良い柔軟剤の、いつも亜紀から漂う香りがした。佑介は亜紀を

直接抱きしめているような錯覚に陥り、一瞬ぼうつとしてしまった。慌ただしく部屋を片付ける亜紀を見つめる。後ろ手で扉を閉めた。二人きりになるなんて、何か月振りだろう。

「そこに座って。どうしたの？ 一体」

洋服をクローゼットに乱暴に押し込めながら、亜紀は質問した。

「まあ、お前も座れ」

亜紀の勉強机に腰かけて、窓の外を見た。自分の生まれ育った家が見える。

お前、たぶん将来あそこに住むことになるぞ。お前さえ良ければだけど。

「どうしたの？ 改まって」

亜紀の顔が、少し曇る。きつと悪い事でも想像しているのだろう。ぺったりと床に腰をおろした亜紀は、不安げな顔でまっすぐに佑介の瞳を見つめた。

佑介はジュースを置いて椅子から立ち上がり、ベッドの端を背もたれに亜紀の横に座った。

ちよつと間が開きすぎたが、別に変なことをする訳でもないのだからで良い気がした。

ドギマギする二人の間に、数秒の沈黙が横たわる。もどかしい。この場に千裕が居たらきつとこう言うだろう。

——さっさとチューしろよ！！女々しいぞたかみー！

「亜紀」

鼓動は、一気に速くなった。
言ってやるぜ亜紀。もしも宮間がお前に何かしても、俺が必ず護ってやる。

「――好きだ」

目を見ようとしたが、無理だった。
俯いたままだったが、しかしはつきりと亜紀は聞こえたに違いない。
佑介は目を閉じてもう一度言った。

「亜紀、付き合ってくれ」

・・・亜紀は微動だにしない。

ゆっくり隣を見ると、俯いてひたすらカーペットの模様を見つめていた。

肩まで伸びた髪が邪魔して、表情は判らない。

佑介が焦って何か言おうとしたその瞬間、亜紀が自分の右手を頬に当てているのが見えた。

泣いているかと思ったが、そうでは無かった。よく見ると耳が赤くなっている。

「・・・・・・・・佑介」

亜紀の声は掠れていた。声はやっぱり泣きそうだった。
髪をかき上げて、やっと視線を合わせた。笑顔だった。

「ありがとう・・・私も大好き」

その瞬間、亜紀がどんな女優よりも美しく見えた。クラス内ではやや地味な雰囲気の読書少女で通っているが、佑介にとってはかけがえのない、

世界にただ一人しか居ない愛する人だ。

感極まって、佑介は思わず両腕を伸ばして亜紀を抱きしめた。目で見るより、ずっと華奢な気がした。

——暖かくて、いつまでもこうして居たくなる。

しかし暫くして気持ちが落ち着くと、ゆっくり亜紀の両肩を自分から放して

「おじさん来たら殴られるな・・・コレは」

と笑いながら自らを律した。

何も急ぐことは無い、ゆっくりでいいんだ。亜紀が大切だから・・・亜紀もクスクスと笑いながら言った。

「お父さんが居なくても放したんでしょ」

「まあな。意気地なしか？」

「ううん」

たった今の瞬間から恋人同士になった二人は、たわいもない話を続けた後一つの約束をした。

それは”一生別れない”じゃなくて、”絶対浮気しない”でもなく――

「いつか・・・こんなの大分先の話だけど」

「ん？」

「もしも俺達が結婚して、お前がこの家を出たら・・・」

「うん・・・」

佑介は突然立ち上がって亜紀を窓辺に連れていき、小さなテラス付きの高宮家の中庭を指差した。

真白いペンキで塗られた真鍮のフェンス越しに、見せたい物があった。

亜紀が目を見開いている。気づいたようだ。

「ブドウだ！」

「おまえんちのだよ。去年埋めたんだ」

鉄製の白いアーチに、葡萄のツルが巻きついていていた。隣には白いワイシャツが干してある。

まるで佑介の傍にいつも居られるようで、嬉しくなった。

「全然気付かなかった・・・ちゃんと世話してくれてるんだね」

「まだ実は付かねえけどな」

「そっか・・・」

さっきの言葉の続きを、亜紀は読み取った。

「きっと、私たちが結婚する頃には一緒に収穫できるよ」

「だろうな」

互いの未来予想図に存在するのは、ツルいっばいに生った葡萄と成長した二人の笑顔だった。

不意に亜紀が、こんな事を訊いた。

「ねえ、私の名前の由来知ってたっけ？」

佑介は、当然とばかりに即答した。

「葡萄の実が生る季節に生まれたから。おじさんも言ってた気がするぞ、ソレ」

「当たり前。覚えてたんだ」

——亜紀はもう、満面の笑みだった。

第十三話 フラゲ

出来たら顔を合わせたくないのだが、帰りが遅いとそれはそれで困る。

各部屋のルームキーは、3人で一枚しか無い。

その一枚を今はなっちゃんが持っている訳で、せつかくの夜も下手に外出できないのである。

千裕たちがここへ来てくれないかと、淡い期待が胸をよぎる。

「遅いね・・・」

青い、大きめのギンガムチェックのパジャマを着た亜紀が時計を見て呟く。

午後9時48分。間もなく消灯の見回りに先生が来る筈だ。

自らが不満と言うよりは、寧ろなっちゃんが先生に咎められるのを心配している様に見える。

由真に慈悲の心が足りないのか、はたまたそれで然るべきなのか、気に留めずにのんびりテレビを見ていた。

「多分男子の方には行っていないよ。先生なんかに見つかったら、女子部屋に居るより怒られそうだしさ」

亜紀の心中を察してそんな事を言った由真だが、もし自分が亜紀の立場だったら気が気じゃないだろうとも思った。

そう思い始めると、次から次へと嫌な予感がして止まらない。

まさかとは思うけど、本当に高宮の所に押し掛けたのだろうか？

もしかしてなっちゃんは、最初からそれが目的なのかもしれない。

それでカードキーを持って・・・？いや、だったら亜紀ちゃんを待たせて私がちょよいと確認して来れば良いんじゃないか？

「うっん・・・それはいいの。佑介を信じてるし、津山君も戸田君も居るから」

決して強がりではなく、どうやら本当に高宮を信用しているようだ。なんだか羨ましくなる。

「それよりも、由真ちゃんは良いの？」

「え？何が？？」

——自分の欲求が見抜かれているというのは案外認めたくないものだ。

誰が見ても滑稽な程、バレバレなとぼけ方になってしまった。自分の頬を思いきり引つ叩きたくなった。無論、恥ずかし過ぎてである。

「桜井君の所に行かないの？私もう少し起きてるよ？」

「いいよ私は・・・苦手な奴も一緒の部屋だし」

「苦手な奴？」

「里峰って男子」

「里峰君？そうなの？どうして？？」

亜紀の驚きようを見ると、普段はあんな口を利いたりする男子ではないのだろう。

だとすれば、詩織が今朝言っていたように反省しているのなら、私から話しかけた方がよい。

それにしても思春期の男子は、時折女子よりも七面倒臭い部分がある。何故あんな風に私を罵ったのか、まずそこから説明して頂きたいのだが。

「ちょっとイザコザがあつてね。気にする程じゃないけど」

「そうなの・・・」

話せば話すほど、亜紀の優しげな雰囲気にはホツとする。

控えめであるが決して暗く無いし、自分の意見も案外ハッキリ言うタイプだ。

高宮君、なかなか見る目あるじゃん。良い奥さんになるよ、この子は。

—— バタン！と、金属でできたドアが音を立てた。

後ろめたい事は何も無いのに、由真は飛び上るほどびくくりして振り返った。

すらりと伸びた細い脚を丁度肩幅に開いて、なっちゃんが腕を組んで仁王立ちしていた。

何だっけ、あれみたい。昔ドラマでやってた、脚立担いで仁王立ちしてた髪の長いOL・・・。

「私の味方はいっぱい居るから」

威嚇するような目つきで、しかし口元には笑みを浮かべて彼女は宣告した。

とはいえ、千裕や詩織、亜紀が居る以上は完全なる村八分にはならない。それを十分理解していた由真は大して怖くも無かった。

第一、近隣住民（女子集団）数人が誤解によって私を嫌ったとして

も村長（詩織）や大地主（高宮）とは既に友人な訳で、誤解が解けるのも時間の問題である可能性が高い。人間、それを踏まえると適切な対応ができるもので。

「なっちゃん、良く聞いて。私、ミチハルが好きなんだ」

なっちゃんの眉が訝しげに歪む。

「詩織に頼んだんだ。ミチハル入れてって。そうしたら高宮君も・・
」

「はあ・・・？」

くそ、しぶといな。まだ疑うのか。

「だからホントに高宮くんは何つつとも思っていないのー！」

力いっぱい否定した。

——後ですごく後悔することになるとも知らずに。

第十四話 バトル

「じゃあ言っておくけど、金輪際私（こんりんざい）と佑ちゃんの邪魔はしないでね」

半信半疑の様子で、なっちゃんは由真に釘を刺した。

金輪際も何も最初からそんなつもりは無かったが、今の状態では”はい”とも”いいえ”とも言える訳がないのだ。

「だから最初から・・・」

「返事!!」

イライラしているのは、もうお互い様だった。いくら冷静に説明しようとしても、馬耳東風では話になる訳がない。

「ねえ！ちよつとは人の話も聞いたら?!!」

怒っている様な言い方になってしまったが仕方ない。実際に怒っているのだから。

由真は短気では無いけれど、特別優しいわけでもない。よって、我慢の限界も人並みだ。

いい加減にしてよ。人の話は最後まで聞きましょうって、まだ教わったこと無いの?

「うるさい!アンタは私を傷つけたのにちつとも反省して無い!!」

「なにそれ!だったら最初に教えてよ!!いきなり怒鳴ったのはそっちの方でしょう??!!」

二人の昂りに危機感を覚えた亜紀が、遂に割って入った。怒りを鎮めるために由真が釈明したのに、ミイラ取りがミイラになったこの状況。

亜紀にも收拾がつかない気がしたが。

「も、もう止めなよ・・・先生来るし・・・」

「森下さんは黙っててよ！」

なっちゃんに怒涛の勢いで凄まれた亜紀は、ビククリしたハムスターの様に飛び退いた。

喧嘩の相手が亜紀だったら、きつと勝負にならないだろうと由真は今の一瞬で思った。

それにしても高宮の事を好きならに強敵だった亜紀を見落とすとは、なっちゃんは案外高宮の事を分かっているのかもしれない。尤も、そのお陰で亜紀は難を逃れたのだけれど。

「とにかくアンタは卑しいのよ！あの千裕とつるんでる時点で普通じゃないわ！！」

「今千裕は関係無いでしょ！誰彼構わず突っかかると友達無くすよ！！」

「あー————っそう！！結構よ！下品な友達なんて要らないし！」

「自分が上品だと思ってんの？！新幹線でヒス起こして大声出すような人が？！！」

もはや高宮の件など、二人とも完全に忘れていた。
口げんかでここまで泥試合になったのは、さすがに由真も初めてだった。

パレットタウンを練り歩いた疲れもあり、本来なら早々に眠たくなるはずだが今はもう体中にアドレナリンが充満して
怒りのパワーが何処からか沸々と湧いてきた。こうなったらもう言いたい放題だ。

「高宮君にはもう彼女が居るの！優しくて可愛い女の子と付き合ってるの！！高宮君を大事に思ってるんならもう放つといてやってよ！」

――覆水盆に返らず。

まずい事を言ったような気もしたが、取り繕うにはもう全てが遅すぎる。

決して嘘は言っていないのに、由真の精神に光の速さで罪悪感が押し寄せた。

今、亜紀の表情を窺ってはいけない。勘付かれたら終わりだ。

なっちゃん目から敵意が消えた。と言うより、勢いも消えたし元気も無くなった。

思わず謝りそうになったが、なんだか余計に傷付きそうなので止めておいた。

由真の中のもうひとりの自分が、由真に非難を浴びせる。
そんな事あんたが言っちゃダメでしょ！亜紀達が解決してこそ意味があるのに、なんて事しちゃったの！？

「私――・・・ずっと待ってたのに」

認めたがらないと思ったが、予想に反してどこか悟った様な、寂しげな表情だった。

もしかして高宮に想い人が居る事に気付いていたのか？

空気の抜けた風船のようになってしまったなっちゃんは、フラフラと浴室へ消えていった。

”かちやり”と鍵が閉まる音と同時に、妙な脱力感が突如部屋に訪れた。

ゆっくりと亜紀の方を見る。亜紀はずっとこちらをみていたようで、暫く目を合わせて黙っていた。

どうしよう　と言わんばかりに目を泳がせて、唇を引き結んでいる。

「・・・・・・・・・・ゴメン」

由真が言うと、頭を振って否定した。

「こんなの・・・誰のせいでもないよ。」

第十五話 それぞれの夜

同じ時刻、高宮佑介は勿論心配していた。

同室の津山と戸田がそれぞれ持ち寄ったアダルト雑誌に齧り付いている最中、高宮は一人だけ悶々と部屋の中を歩き回っていた。そんな物よりも、もっと気になるのは亜紀が無事かどうかなのだ。ところが一人だけ参加しない高宮に、二人が声を掛けてきた。

「高宮は？」

「おいおい、優等生ぶってんのか？ 見ろよ津山の。すげー趣味だぞ」

「凄くはねーよ！ そんなにマニアックか？？」

今までそれどころでは無かったが、高宮も立派な中学生男子である。そこまでもつたいぶられると、気になってしまう。いかかわしい気持ちと言うより、好奇心で覗いてみた。

「見せろよ。どんなだ？」

「ほらコレ！ 縄とムチだぞ！！ 完璧にSMじゃねーか！」

「声でけえよ！ お前だって興奮してんじゃねーかよ！！」

いやはや、こんな所を亜紀に見られたら言い訳できないな。でも俺は亜紀をこんな風にしたいとは思ってないぞ。多分な。

”ピンポン”と、やや大きめの音でドアチャイムが鳴った。時計

を見る。10時5分か・・・先生だな、おそらくは。急いで証拠隠滅をして、澄ました顔でドアを開ける。

しかしドアの向こうに立っていたのはミチハルだった。

「なんだミチハルか」

「佑介、先生来たらもう寝るの？」

「なんで？」

「詩織たちがトランプやるうって。由真も呼びに行くらしいよ」

「俺はいい」

ぶっきらぼうに答えた。今はそんな事より――

「・・・あ！やっぱり行く！！」

目を離れた隙に、もうミチハルが消えていた。不思議に思っただけ半開きのドアから頭を出すと、腰に手を当てた坂内先生とばかり目が合ってしまった。

「どこへ行くつもりなの？」

ニヤニヤと薄気味悪い笑みを浮かべて、高宮に質問してきた。

「へへ・・・もう寝るよ。おやすみ先生」

「まったく、詩織たちの班は何かと問題が多いわね。津山！戸田！居る？」

急に声を張り上げたので、傍に居る高宮は縮み上がった。

部屋の奥で、二人が声を揃えて返事をする。

やれやれと言った感じでため息をつくとき、先生は部屋を出ないように再三注意をして出て行った。

教職って大変だなあ、と高宮は他人事のように感じながら鍵を閉めると、多分まだ盛り上がっているだろう二人をよそに、早めに床に就いた。

・ ・ ・
もしかすると、その際高宮が亜紀の無事を祈っていたから、揉め事がある程度で済んだのかも知れない。
誰にも知る由は無かったが・・・。

そして聖書にもある通り、天は誰の上にも、どんな状況でも同じ太陽を昇らせる。

昨日、局地的に台風が襲来した1216号室も例外ではなく、分厚いカーテンの向こうには美しい早朝の風景が広がっていた。

あの騒動の後に詩織と千裕がこの部屋を訪ねた頃には、由真も亜紀も疲弊していて夜遊びどころではなかったため、丁重に追い返した。なつちゃんと言うと、お風呂から上がると一言も喋らずにベッドに入って布団をすっぽり被ってしまった。

1時間位浴室に立て籠もっていたのは、泣いていたからだろうか。胸が痛む。流石に言っではいけない事だった。

時計のアラームが鳴る前に目覚めた由真だが、二つのベッドの内一つがもぬけの空になっている事に気が付いた。

まだ時刻は5時を回って間もない頃である。亜紀は何処に行ったのか？

洗面台、トイレ、浴室を其々確認するが居ない。それとなくクローゼットを開けて中を覗き込むが、かくれんぼじゃあるまいし居る訳がない。

諦めてベッドに戻ろうとした由真が振り返ると、いつの間にか背後になっちゃんが立っていた。寝ぼけた様な顔で由真を見つめている。どう接するべきか思案に暮れていると、ちよつと掠れ気味の声でなっちゃんは言った。

「あなた、本当に桜井が好きなのね」

「え・・・」

彼女の目に、昨日までの刺々しさは無かった。いつか体育の時に見た、チームをまとめる時の凜々しい顔つきに戻っている。

「寝言で言ってたわよ」

「・・・う、うそ?! ホントに?」

「嘘に決まってるじゃない」

軽く流して、なっちゃんはまたベッドに戻って行った。

狐に摘まれたような気持ちとは、おそらくこの状態の事を言うのだろう。

なっちゃんの思惑がさっぱりわからず、自然と眉が八の字になる。暫くしてようやく試された事に気付いた由真だったが、そんな事で信用してもらえるなら安いものだと思ってもう少しだけ寝ることにした。

少しだけ、心が軽くなった気がした。

第十六話 キリン

横浜中華街。修学旅行や観光旅行の定番スポットだ。

由真達は今まさに、その中華街の一角で班行動をしている訳である。蒸籠から立ち昇る湯気、至る所にある天心の屋台、奇怪なお土産屋・

取って付けたような中国の雰囲気の中、一人だけそわそわと落ち着きがなかった。

「オイ、たかみー。キョドってんじゃねーよ」

千裕の目は好奇に満ちていた。制すのも変な気がした由真は、取りあえず合わせてニヤニヤしておいた。高宮の心中は、痛いほど分かっているけれども。

「いや・・・」

歯切れの悪い返事をして、黙ってしまった。こんなに鬱々とした高宮を見るのは初めてだった。

そりゃあそうだ。昨夜見事に三人同室になってしまったのだから。本人（高宮）にしては何かあったのか、若しくは無かったのか、気になって仕方ないのだろう。

由真には聞きたい事が2、3個ある筈だ。いや、もしかしたらもつと。

「そっぴゃー由真、昨日何か有ったの？詩織たちがせっかくトランプ持ってたのにさ」

時々、詩織は何もかも知っているように絶妙な質問をする。何だか

んで一番空気読んでいるのはこの人かも知れない。
由真も約一名を安心させる為に、喜々として答えた。

「ううん、ちょっと亜紀と話込んだじゃって・・・」

高宮をちらつと見やる。案の定、目が合った。

「森下ちゃん？いつも小説読んでるちっちゃい子？」

詩織は基より、大体のクラスメイトの印象はそんなものだろう。千裕など亜紀の存在すら知らなかったかも知れない。

「そう、なんか気が合ってさ。今日一緒にトランプしようよ」

「いいよ。人数多い方が楽しいし、森下ちゃんも一人じゃかわいそうだから」

そこまで聞くと、千裕が思い出したように口を挟んだ。

「つーか、由真大丈夫だったの？アイツ。アタシは無理だね、もう」

「え・・・ああ」

何と言ったら良いのか。できたら昨日の出来事を洗いざらい言っ
てしまいたい。

・・・でも

「何ともなかった。口も利きたく無いんじゃない？」

「ははっ！こっちのセリフだっつーのになー!!」

千裕の事は信用しているが、由真にだって言っている事と悪い事ぐらいは判っている。コトが大きくなったら、最終的に困るのは亜紀と高宮だ。

自分のせいで揉め事が起こるのは、どんな事であれもうまっぴらだし。

「なあ、飯にしようぜ。腹減った」

高宮がわざと大きな声で言う。その声に続いて、ミチハルも賛同した。

「僕も。ホテルの朝食、あまり食べてないし」

「オムレツとか美味しかったよ？ミチハル、好き嫌い多いの？」

「低血圧なのだよ。由真と違ってデリケートなんだよね、僕」

「なんだそりゃ」

ミチハルは、案外冗談を言う方だ。気配りなのか天然なのかは謎だが、口数は少ないのに話し掛け難くも無いのである。

ともあれ、こんな他愛もない会話がやっとできるようになった。

ありふれた日常の中の、ミチハルに関する部分だけをスチール写真に収めてとって置きたい。

・・・誰かビデオに撮って！この貴重な日常を！！

「詩織ギョウザ食いたい！！あと杏仁豆腐！」

「じゃあアタシは炒飯と肉が食いてーな」

「肉って何だよ！太るぞお前」

前を歩く三人を遠目にさり気なくミチハルの隣に陣取った由真は、できるだけミチハルと話をした。

修学旅行が終わっても、話がしたいから。

ミチハルは、ゆっくり歩く人だった。

背が高いし脚も長いので、歩くのも速いと思っていた由真は不意を衝かれた。

悠然と歩くその様子は、サバンナでのびのびと群を成す草食動物を彷彿とさせる。由真はちよっと首を傾げた後、的確な比喻を思い付いて一人で納得した。

ああ、キリンだ。キリンに似てる。

「ミチハル、何が食べたい？」

「う〜〜ん・・・何でも食べるよ？肉も野菜も。由真は？」

「私も中華は全部好きだよ。油っこいけど」

「そう言えば、千裕と一緒に居ると絶対何か食べさせられるでしょ？菓子とかジュースとか」

「確かに！私も昨日からポテチばっか食べてる！！」

「絶対太るよね、千裕と居ると」

「多分本人もこれから太るよ」

クスクスと、二人で声を殺して笑った。

おどけて話す時のミチハルは、一番無邪気に見える。普段涼しい顔でピアノを弾いたり、しかめっ面で授業を受ける彼とは別人みたいだ。

家柄にしろ、仕草にしろ謎多き人物であることに変わりはないが、それでも由真は好きだった。

——夕方ホテルに戻ると、亜紀は両手にお土産を沢山提げていた。両親、兄弟、近所の人……もしかして剣道部の後輩の分も買ったのかも知れない。とにかくすごい量だ。

「一日でこんなに買ったの?!」

「うん、一緒に回らなかった人も居るし」

「ああ……!なるほどね」

亜紀は一つの紙袋を開けると、小さな銀色の指輪を取り出した。見覚えがある。確か料金追加で名前を彫ってくれる、露店のシルバーリングだ。

亜紀の誇らしげな表情から、それが誰宛なのかは見なくてもピンと来た。

「……羨ましい」

自然と、由真の口から洩れてきた。そんなプレゼントが出来るのは、恋人同士ならではだろう。

「いつか……櫻井君と付き合えたらいいね」

「付き合えるかな……?」

「大丈夫だよ」

沈む夕日で真つ赤に染まつた静かな部屋で、二人の声は宙に舞って、それからゆっくり絨毯に吸い込まれていった。

第十七話 某日

愛知県豊橋市の、ただただ広い田んぼ道の一つを、一台の自転車が爽快に走り抜けて行く。

午前中に降った雨のせいで、あぜ道は泥濘ぬかるみと化していた。何処からかカエルの鳴き声が聞こえる。・・・田舎の証だ。

その緩んだ土の上に二本の細い轍わだちを描いて、黒いメタリックカラーのシンプルな自転車が小さな住宅街へと向かっていた。

その住宅街の中で、ひときわ目立つ緋色のレンガ壁と深緑の大きな屋根の付いたお屋敷（ここに連れて来た友人、高宮の弁によればそうらしい）

の前で、少年は自転車を降りた。背中に背負ったスクールバッグの中、油絵の道具セットがガラガラと音を立てる。

教科書は全て学校のロッカーに入れてあるので、持つて行く物など筆記具と楽譜と絵画道具ぐらいなのだ。鞆が軽いワケである。

真黒い真鍮の門を開けて自転車をその辺に停めると、櫻井満晴は櫟の木でできた大きなドアを自分の通れる幅だけ開けて、中に入った。

玄関先にまでピアノの音が聞こえる。今日はレッスンの日じゃないから、母が練習しているのだろう。

ここに通うレベルの生徒が、ラフマニノフをこんなに長く弾ける訳が無い。

邪魔をするのも悪いので、満晴は何も言わずにまっすぐ自分の部屋に向かった。途中、キッチンに置いてあるパンケーキを2、3切れ取って口に運ぶ。

何と言ったって、成長期はお腹が減るのだ。

自分の部屋の鍵を掛けると、スクールバッグを開いて楽譜を取り出した。由真が初めに見た、久石譲の summer だ。

よく学校で楽譜を眺めている満晴だが、別に読んでいる訳では無い。ただ、何も持たずに考え事していると周囲の人々に心配されるので（大きなお世話だと思うよ、僕は）間を持て余した時などは、よく取り出すのである。

ひとりの時もつい、その癖が出るようになった。手に持っていないと、何だか落ち着かない。

「満晴、帰ってたの？」

三つ上の姉が、ドア越しに話しかけた。

「ねえ、パンケーキ食べた？勝手に食べたよね？」

「食べたよ。なんで？」

キッチンカウンターに置いてあるものは、彼は問答無用で食べる。それが好物と有らば、尚更だ。

「ちょっとおー！皆で一緒にたべようってお母さん言ってたのにー」

「そういう集団に縛られる思考、ヤバイよ。個々で自由に楽しく・・・」

「さつさと宿題やりなさいよ。どうでもいいから」

捨て台詞を吐くと、パタパタと足音が遠ざかって行った。大学受験を控えて、ストレスが溜まっているのだろう。

ほぼ同じ境遇の、高校受験を控えた満晴は深く同情しながらベッドに身を投げた。

最近友人が増えた気がする。

以前まで千裕と佑介くらいしか、友人らしい友人は居なかった。集団生活と言うものが、どうにも苦手なのだ。

しかし最近になって同じクラスの水澤由真や二矢内詩織とよく喋るようになった。

皆が振り返る容姿の詩織は言うまでも無いが、水澤由真も満晴はそこそこ美人だと思っていた。

クラス替え初日に里峰が由真に因縁を付けたのは、何かしらの好意があっただんじゃないかと踏んでいるくらいだ。

千裕とつるんで居る時に際立つのは、そんな由真の儚さだ。

人を求め、人に希望を見出そうとしているのに、彼女は絶望しているようにも見える。

由真と話すようになって思ったのだが、彼女は自分以外の誰かに過度の期待をしていない。

誰かを無理に自分の世界に引き込むことを、極端に恐れているように感じた。千裕や詩織にすら本当に心を開いているのか、満晴には判り兼ねた。

「お帰り満晴。ご飯できてるわよ」

少しまどろんでいた満晴だが、母の声で渋々ベッドから起き上がった。

近頃の満晴の考え事の多くは、その儚い孤独の影を抱えた少女についてだった。当の本人は、全く存じ上げないだろうが。

第十八話 夜明け

修学旅行から1週間が経った月曜日の夜、由真は浅い眠りの中で夢を見ていた。

深夜だろうか、幼い日の由真はミラパルコの後部座席で体を丸めていた。

眠ろうと思えば眠れないことも無いが、古い軽自動車のドアの隙間を抜けてくる冷たい風は、まだ十一歳の少女の小さな膝を刺すようにシート下部を這い回る。

土曜日だった。今日も明日も学校へは行けない。逃げ道を奪われた由真は、はやく母親が帰ってくることを祈った。

早く自分のベッドへ行きたい。多分もう今日はお風呂には入れないだろうから、せめてはやく毛布がほしい。

寒さで痛くなってきた頭をもたげて、フロントガラス越しにスナックのネオン看板を見た。煌々と灯る明かりが顔を照らす。固く詰まった鼻をすすりながら体の向きを直した。多分母は、店が終わるまで戻ってこないだろう。

多分、私がこれを父に告げ口することは出来ないことを母は確信している。母に反逆すると、しばらく家で人間的に扱ってはもらえないのだから。

・・・無論今までだって、ろくな扱いを受けた覚えは無いけれど。

場面が変わり、明け方になっていた。

運転席には知らない男性が居て、助手席の母に愛想笑いをしている。車は大通りを抜けて、家に到着した。しかしいつまで経っても母は車から降りようとせず、キスを求めてごねる母に男性は明らかに迷惑していた。

由真は、申し訳ないやら情けないやら、しかしどちらを弁護する訳にもいかずにひたすら困惑していた。

こんな所を同じアパートの住人に見られて噂になったら、一体母はどうするつもりなのだろうか。

およそ二十分の押し問答の間、由真はただ俯いて黙っていた。

ようやく、渋々ながらも母は車を降りた。

「もういい。自殺する。私、死ぬから。」

母はいつもと同じ捨て台詞を吐くと、店のライターを投げ捨てて早足でアパートの階段を上っていった。

しまった。

眠気で十分に頭が廻らなかったのか、反応が遅れた。

急いで母の後を追って階段を駆け上がり、ついさっき閉まったばかりのドアに飛びついたが、一步遅かった。何度もドアノブを回したが、押しても引いてもドアは開かなかった。腹いせのつもりなのか、それとも男性の注意を引く為なのか、まんまと締め出されたのだ。

途方にくれて駐車場を見下ろすと、例の男性は見ないふりをして携帯で誰かと電話していた。

勘弁してよ、十二月なのに。

絶望と悔しさで目頭が熱くなった。泣いたところで誰も慰めてはくれない。自分には誰一人として味方が居ないことを理解した由真は、この寒空で凍死して新聞に載らないようにともかく泣くのをやめて考えることにした。

みじめに鼻水をすすってジャンパーの袖で涙を拭う。偽善者すら目

の前に現れない身の上に嫌気が差したが、それもずいぶん前に自覚していたので今更誰かに助けてもらおうとは思わなかった。

辺りを見回した後、一縷の望みをかけてトイレの小さな高窓によじ登って手をかけた。哀れな子供に神が慈悲を与えたのか、奇跡的に普段閉まっている筈の鍵は開いていた。由真は平均的な小学生である自分の体型に感謝しながら、縦三十センチ、横四十センチの窓枠をどうにか体を捻じ曲げて通った。

擦り剥いて皮のむけた肘をさすり、便座の上に立つ。埃にまみれながら窓をそつと閉めると自分の部屋へ忍びあしで向かった。

残された僅かな精神力を振り絞って、一步一步を慎重に歩いていく。
・
・

——ああ、そうだ。その後結局見つかって……………

安堵のため息が終わるかどうかというタイミングで、小さな少女は振り向きざまに世にも恐ろしい顔をしたメデューサと目が合った。いつそのこと本当に石化してしまいたいと思ったが、そんなメルヘンな事は言っていられない状況だ。

「私がいつ入っていいって言った？」

こついう時は黙っていたほうが得策だ。何を言おうと、口を開けば殴られる。

けれど今日はどうやら何をして、しなくても同じだった。

すこぶる機嫌が悪い母は、ジャンパーの襟をつかんで由真を力いっぱい殴りつけ、玄関ドアに突き飛ばした。

「質問に答えろ！私が入って良いつて言った？！」

由真はいつもそうする様に、まるつきり無表情で玄関に座り込んだ。

それが精一杯の反抗だった。うんともすんとも言わない由真に腹を立てた母は、どしどしと足音を立てて台所へ向かった。戸棚を開けて何かを取り出す音がする。

しかしここで外に飛び出したら負けだという事も由真は知っていた。第一、母が機嫌を損ねると刃物を持ち出すのは日常茶飯事だった。しかしいつも起こっていることだからと言って、怖くない訳はない。喉元に包丁を当てられている時は毎回、死を覚悟しなければならぬ。いし、お気に入りのトレーナーと共に腕にかすり傷を負った事もある。

最悪の状況だったが、しかし道を選ぶのはいつも自分自身だった。まあ、凍死するか刺されて死ぬかだったら、同じようなものだけど。ともかく、家の中で事故が起きれば母は何も言い訳できないだろう。今まで母にやられたケガでは一度も病院に連れて行ってもらっていないけど、あまりに重傷なら間違いなく救急車騒ぎになるか、さもなければこの家は近日中に葬式を開く事になる。

この家で育っていく位なら、ここで……。そう思っている筈なのに、由真はドアのチェーンを開けて飛び出した。

・・・死ぬもんか。

殺されるくらいなら、私があの子を殺してやる。

ドアを閉めると同時に、キーンという金属音がした。外に出なかったら、あれが背中にあたっていたのかも知れない。階段を駆け下りる最中、金属音の残響と自分の心臓の音に脳内を埋め尽くされて気が狂いそうになった。ヒューヒューと喉が鳴り、家の近くを流れる川まで逃げたあたりでようやく走るのを止めた。

人目につかない橋の下でうずくまり、これからどうしようかと考える。

た。胸の中とは対照的に、清い水がサラサラと穏やかに流れる。

その時、向こう岸から笑い声が聞こえた。

何故か向こう岸には菜の花が咲き、中学生くらいの女の子が魚を釣っていた。

その様子を眺めているうちに冷静さを取り戻した由真は、昨日の晩ご飯以降、何も食べていない事を思い出した。

鍵と一緒に菓子も持って出れば良かったなあ。

と思いながら来た道を振り返ったが、今帰ったらもつとまずい事になるのは明白だ。

空腹感が惨めさを倍増させる。自然と涙が頬を伝い、顎の先からぽたりと膝に落ちた。

「ポテチ食べる？」

聞きなれた声に振り返ると、いつの間にか千裕が河原の芝生に不良座りしていた。

傍らに置いた白いビニール袋の中からポテチを一袋取り、茫然としている由真に手渡す。

「食いなよ。子供なんだから」

千裕はそれだけ言うと、スニーカーのまま川をザブザブと渡って行った。

お礼を言わなきゃ――

口を開くと同時に、辺りは暗闇になった。

・・・薄目をあけると、キティちゃんの座布団が散乱した例の部屋にいた。向こうのベッドで、千裕がタオルケットを蹴飛ばして眠っている。

暗闇の中で由真は声を殺して少しだけ泣いて、また眠りに落ちた。

第十九話 フォルテ

太陽が西に傾き、美術室に向かう途中の渡り廊下は橙に染まっていた。

文化部の生徒は、大体が地味である。

西部中の美術部は男子生徒が一人もない女の園だが、その割には華やかさが無くやはり地味な女子が目白押しだった。

やや目立つのは転校してきた由真と、完全に美人の類である詩織と、部長でクラスメイトの河田緑里かわだみどりだろうか。

ともかく、今日も4時半から美術室には独特の気だるい雰囲気がい始めるのである。

由真は絵が特別上手い訳でも無かったが、運動部に今更入るのも白々しい気がしたし、詩織に強く勧められもしたので入部したのである。

ちよつと不謹慎な気もしたが、下手でも無いので別段浮いてもいない訳で。

「あ・・・緑里さん」

すりガラスのついた重い引き戸を開けると、大きなカンバスに筆を振るう華奢な背中が見えた。

3年生も後輩も、皆何故か彼女のことをさん付けで呼ぶ。

独特の雰囲気のせいなのか、それとも美術顧問に絶賛される程の腕前のせいなのかはわからない。

いつも教室に一番に来る緑里さんは、涼しげな表情を少しも変えず、カンバスに向かったまま左手をひょいと挙げた。

よく見ると、スカートを捲り上げて椅子の上にあぐらをかいている。

蒸し暑いからだろうか？

普通の人がやるとだらしく見えるけれど、彼女くらい貫禄があると妙にアーティストっぽく見えてしまう。何だか羨ましい能力だ。真似る様に、由真も何となくセーラー服のフラスナーを開けてパタパタと仰いでみた。

相変わらず真剣に何かを描く緑里さんを横目に、由真は準備室へ絵具を取りに行った。

——私にも何か夢中になれるものが有れば良いのに。

絵でもいい、楽器でもいい。何か他人に誇れるものが自分に在るだろうか？

このまま何もかもを環境や親のせいにして、青春時代を棒に振って良いのだろうか？？

心のモヤモヤを、しんとした美術準備室から見える黄昏と重ね合わせた。

窓を開けると、少しだけひんやりとした風が入る。

由真はここから見下ろせる全ての風景を眺めて、ただ、考えていた。この先どんな高校へ行き、どんな道を選び、どんな人と結婚するのだろうか。

・・ミチハルのような人が良い。ミチハルと結婚できたらどんなに――。

校舎脇のプールを見る。

活気あふれる水泳部の中に、今日はミチハルの姿が無かった。

元来気まぐれな所のあるミチハルは、結構サボリ魔でもあった。おそらくはもう帰宅してピアノでも弾いているのだろう。それともテレビか。

何となくがっかりして美術室に引き返すが、まだ緑里さん以外に誰も来ていなかった。顧問の先生もまだ来ていない。

張り詰めた空気に追われるように、行く宛ても無くふらりと廊下に出た。

白く冷たい壁を伝いながら、自然と足は音楽室へ向かっていた。何をしに行くのでも無いけれど、何となくミチハルが居れば良いと思っただ。

吹奏楽部はこの学校には無い為、放課後の音楽室には鍵が掛っている。

しかしほとんどの生徒が知っているように、廊下側の一番左の窓には鍵が掛らない。つまり、実質解放されているようなものだった。それを勿論、ミチハルも由真も知っている。

3階に上がると、廊下の彼方からピアノの音色が聞こえてきた。

” summer ” ミチハルがいつも弾いている曲だ。

小走りで音楽室の窓に駆け寄ると、思った通り窓が開いている。覗き込むとミチハルが中でピアノを弾いていた。

譜面立ての向こうからミチハルの真剣な表情が見える。

と、気配に気づいたのか、演奏を止めてこちらを向いた。

急に目が合い、嬉しいやら緊張するやらで由真ははにかんだ。ミチハルの口元にも、微笑みが浮かぶ。

「先生に見付かったかと思った。由真・・・部活は？」

「ミチハルと同じ」

「へへ。それを言われたらねえ」

教室に入るタイミングを逃し、けれどまだ話がしたくて窓枠に手を掛けて喋りつづけた。

「ミチハル、高校どこにするの？」

沈黙を避けるための、何気ない質問の筈だった。彼の返事を聞くまでは。

「・・・由真、バカにしたりしないでね？」

「しないよ。どうして？」

「・・・東京の・・・音大付属高校」

ちよつと緊張気味に、もったいぶってそう言った。そう、確かにそう言った。

「・・・へ???！」

思わず眸がこぼれ落ちそうになった。

鈍器で後頭部を殴られたような衝撃が走り、全身の力が抜けてしまった。

「・・・ピアニストになりたいんだ。夢みたいな話だけど」

真剣な眼差しが、痛いほどに由真の気持ちを揺るがす。けれど、気持ちと真逆の言葉を贈らなくてはならない。大袈裟なほどに、両手を振るって満面の笑みを造った。

「大丈夫だよ！ミチハル、ピアノすごく上手だよ！」

それに応えたのはミチハルの、心から嬉しそうな笑顔だった。

「ありがとう由真！ホントにすごい嬉しいよ！」

「練習頑張りなよ。凄く難しいんでしょう？」

縋る様に、確認してみた。

難しいよね？そして滑り止めは近くの高校にするよね？？お願い――

「うん・・・でも、俺にはピアノしか無いから」

「・・・」

これ程までに、ミチハルとの間に壁を感じたのは初めてだった。
涙がじわり、じわりと滲んできて、もう少しでバレてしまう。

「あ・・・そろそろ先生来たかも」

「え？部活？なんだ！サボりじゃ無いんじゃない」

「はは、真面目だからね。誰かと違って」

「はいはい。行った行った」

顔を合わせられず、逃げるように廊下を駆け抜けた。

足が纏れて、階段の踊り場で思わずしゃがみ込む。

自分の顔が歪んでいくのが、はつきりと分かった。気がつく、唇が痺れるほどきつく噛み締めていた。

——誰も此処へ来ないで・・・立ち上げられるまで・・・

両手を組んで胸に固く引き寄せ、顔を伏せた。

廊下の向こうから再びピアノの音が聞こえてきて、それが余計に由真を悲しくさせた。

優しくて、穏やかで、きれいな思い出のような曲。

まるでミチハルの人格を音符にしたような、そんな曲だと思っていた。

” s u m m e r ”

この曲が好きなわけを訊こうと思っていた。
いつか、ずっと先に。

第二十話 答え探し

「お帰り由真ちゃん、進路はもう決めたの？」

くすのき厚生館の伸びきった生垣を大きなハサミでバサバサと切り落としながら、阿部先生は帰ってきた由真に笑顔で訊いた。

「わからない」

目も合わさずに下駄箱を開けてスリッパを出す。
分らないと言うより、もうどうでも良かった。今から勉強した所で入れる高校なんて今と大して変わらないだろう。

奨学金だつて貰えるかどうか判らない。登校拒否児だったし。

もう私に期待できるものなど、何も無いのだ。

終始俯いたままの由真を見て、阿部先生は的外れな慰めの言葉を掛けた。

「焦らなくても良いんだよ。やりたい事なんてそのうち見つかるから・・・」

聞こえなかった振りをして、足早に自分の部屋へと向かった。

やりたい事など見つからなくても良かった。今までずっとそんな事考えなかった。ただ、はぐれ者になりたくなかった。

普通に勉強して、何の心配もせず自分の行きたい高校を選んで――

一軒家じゃなくても良い。家族全員が一緒に住む、ごく普通の家に帰りたい。

ちよつとくらいずばらでも良いから、毎日ご飯を作ってくれて、優しいお母さんが欲しい。

仕事ばかりでも良いから、お母さんに一途で浮気などしないお父さんが居て欲しい。

それが無い物ねだりだとしても、時に他のクラスメイトが死ぬほど羨ましく思えた。

歩美も千裕も、この施設の子供たちは皆同じ境遇なのに一体どんな事を考えているのだろう。

この不条理の底辺で、まるで打ち捨てられたゴミのように寄せ集められて、それでも普通の人と呼んでもらえるのか・・・？

一番必要としてくれる筈の両親に、私たちは捨てられたのだ。

残された道など、一生人を信用しないか、愛情を求めて道を誤りやがて廃人になるか・・・

その二つしか考えられなかった。

努力なんて然るべき人がしてこそ実になるものだ、そう思えてならない。

何をどうしようと、八方ふさがりではどうしようもないに決まっているではないか。

その考えに根拠はないけれど、今の由真は誰が何を言おうと立ち直れそうになかった。

転校、引越、虐待からの保護という様々な環境の変化に疲れていたのかも知れない。もう誰とも口を利きたくなかった。

荷物を乱暴に置いてベッドに潜り込むと、掛け布団をむちゃくちゃに殴りつけて嗚咽を堪えた。

——音大付属なんて落ちればいい。何かの間違いでミチハルが私と同じ高校に行けばいい。

起こるはずの無い事だったけれど、そう願わずには居られなかった。自分が最低な人間になった気がした。

その夜、由真は久しぶりに一晩を悩みぬいた。

同室の千裕と歩美が心配するほど、口数が少なかった。

どうにもならないことや、叶う筈の無い願い事について考えるのは苦痛でしかなかった。

けれども、由真は何かを見出そうと考え続けた。

ミチハルへの想いだけは、確かに誇れるものだから。

第二十一話 尊い日々

朝、目を覚ますと蝉が鳴いていた。7月の上旬だから、当たり前と言えはそうなる。

千裕はテニス部の朝練で既に居なかった。歩美も日直でもう居ない。深くため息を吐く。結局気持ちは整理できなかった。

のろのろと着替えているうちに時間が無くなり、またもおにぎりを片手にくすのき厚生館を出発した。

ミチハルには、会いたくない。

そう思っていた筈なのに、教室に彼の姿が無いと自然と音楽室へ行ってしまっ自分が居た。

階段を上ればすぐに音楽室がある。始業ギリギリまでピアノを弾いていることも、稀にあるのだ。

鬱々とした表情で廊下に出ると、ちょうど楽譜を持ったミチハルと鉢合わせになった。

「おはよ〜」

いつもの調子の、優しいトーンの声がその口から聞こえた。

あと何回聞けるだろう？聞けなくなる日が来るのだ。直ぐじゃないけど、いつか絶対。

「おはよう。暑いね」

顔を見られず、ミチハルの胸元に目を落とす。二番目のボタンが開

いていて、ちょっとドキツとした。

なんて綺麗な肌してるんだろう。日焼けしていない所を見ると、部活にはほとんど行っていないようだ。

思わず凝視していた事に気付き、由真はハツとしてミチハルの目を見た。てつきりスケベ扱いされるかと思いきや、ミチハルは思い出したように笑い出した。

「今日は開けっ放しじゃ無いんだね？由真??」

「・・・は？」

意味がさっぱり分からず、繰り返した。

「開けっ放し？」

ミチハルはまだ笑っている。由真はますます混乱し、目を白黒させてきよろきよろと周りを見た。

一呼吸置いて、優しい笑みのままミチハルは答えた。

「ファスナーの事だよ。昨日開いてたでしょ」

「ファスナー・・・・・・・・・・・・・・・・!!!!?」

・・・由真はやつと気付いた。昨日、美術室で制服のファスナーを開けてから、施設に帰ってもそれが開けっ放しである事に全く気がつかなかったのだ。今の今まで。

「な、何でその場で言っ・・・すぐに言ってよ!!」

顔から火が出そうだったが、その日に着けていた下着が偶然買ったばかりの可愛いものだった事を思い出し、ちょっとだけ安心した。

ダサイやつじゃなくて良かった・・・ほんと。

「わざとじゃないんだ？」

「当たり前じゃん！！変態か！」

始業のチャイムが鳴る。

ツツコミを入れつつ、くるりと踵を返して席に戻った。ミチハルも類笑みながら自分の席に着き、相変わらず楽譜を眺めていた。今まで物憂げに見えていたが、最近になってあれがミチハルにとって普通の状態なのだとようやく理解した。単にボーっとしているだけのだろう。

間もなく坂内先生が教室のドアを開けて、いつものように出席を取り始めた。

「・・・はい、全員出席ね。えー、もうすぐ夏休みですが」

言うが早いか、教室内は異様に盛り上がった。クラスの派手組に混じって、詩織も拍手している。

中学校最後の夏休みだ。青春だなあ、皆も私も。

「盛り上がるのは大変結構です。でも、いくら豊橋が田舎とは言えくれぐれも危険な所へ行ったり、妙な事件を起こしたり、宿題をサボったりはしないように！！」

聞く耳を持たない生徒たちを相手に、坂内先生は大声を張り上げて言った。まるで小学校のプールの授業だ。拡声器使わなきゃ。

「一時間目は予定を変更してホームルームです。名簿番号順に一人ずつ隣の教材室に来てください」

「センサー！その間は自習なんでしょー？」

空かさず詩織が質問した。いかにも、サボる気は満々である。

先生は眉をひそめ、きっぱりと言いつつ放った。

「自習というのは、自分で学習するという事です。お友達と喋ったり、トランプやUNOをする時間では無いのよ」

先に釘を刺された詩織は、はいとだけ言いつつ机に頬杖をついた。

「じゃあ一番から！相沢さん、いらっしやい」

先生が教室から出た途端、やはり詩織は鞆をゴソゴソと弄り始めた。何をするつもりだろう？と、興味津津で眺めていると、トランプでもUNOでも無く、なんとオセロ盤を取り出していた。いつも持ち歩いてるの？！そんな物？？

私語に夢中になっているクラスメイトを尻目に、いそいそと由真のもとへやって来た。

「オセロやろう由真」

どうせ勉強するつもりも無い由真は、ニヤリと笑って頷いた。

第二十二話 意思

詩織と二人、すっかりオセロに没頭していると、進路相談を終えた本多という男子が由真を呼びに来た。

ミチハルはと言うと、教室に戻るや否や珍しく勉強していた。滑り止めの高校の為かも知れない。

教室を横切りながら、暗い気持ちになっていくのが分かった。出廷する容疑者の心境を、もう少しソフトにしたらこんな感じだろう。罪状は無いが、夢も希望も無いし。

「失礼します」

窓に掛ったカーテンが、ドアを開けるとバサツと音を立てた。今日は風が強いみたいだ。

「水澤ね・・・まあ、座って」

薄く埃を被った生徒用の机を挟んで、目の前の椅子に座る様に促された。机の上にはたくさんの書類と名簿、ファイル、赤ペンが点在している。

由真と先生の間には、何とも言えない緊張感が漂う。お互い、どうにもならない状況だという事は理解しているのだ。

「・・・あのね、水澤」

非常に言いにくそうに続けた。

「そのお・・・福祉施設の先生から・・・お話は聞いた？」

「お話？」

何も言われた覚えはない。強いて言われたことといえば、先週千裕と下水管に爆竹を入れるのは止めると怒られたくらいだ。首を傾げて、わかりませんと言った。

「中学校を卒業したら・・・またお母さんと住まわれるのよね？」

今先生が何を言ったのか、理解する事が出来なかった。しかし坂内先生は構わず喋っていた。

「それで先生考えたんだけど、高校ってどうしてもお金掛るし・・・ね？」

俯く事も出来ないまま、由真はただ黙っていた。

やめてほしい。

もう、何を言いたいのかは判ってしまった。

「働くって選択肢もあるんじゃない？ほら」

坂内先生は静かに、同情するような笑みを浮かべて由真の顔を覗き込んだ。由真が頷くのを待っているに違いない。

おもむろに、由真の目の前に1冊のファイルが出された。学校でよく見かけるあの厚紙製のピンク色のファイルに、太字マジックで”就職斡旋先（今年度）”と書かれていた。

死刑宣告を受けたようだった。

「持って行って、ゆっくり考えなさい」

言いたい事は山ほどある。しかし由真は受け取ってそのまま黙って席を立った。

打ちのめされないように、涙が出ないように、感情を殺した。一番安くてバカな高校でもいい。進学先を教えてくださいとばかり思っていた由真は、世界中で誰よりもバカで貧乏になった気がした。気持ちとは裏腹にすっかりした足取りで教室を出ると、貰ったファイルが文字が見えないように胸に抱えて教室に戻ってきた。ドアを開けるなり、背の高い女子にぶつかりそうになる。

なっちゃんがちょっと驚いたような表情で由真を見た。が、由真は目を合わせることも無く通り過ぎた。怒ったなっちゃんに腕を掴まれる。

「何黙ってんのよ。もう終わったんでしょ？」

やっと目を合わせた由真に、表情は無かった。まるで肖像画のようにピクリとも動かないのだ。

「なに・・・？どうしたのアンタ？」

肩を揺ると、その衝撃で固く閉じていた口が開いて、やっと乾いた声が聞こえた。

「・・・頭痛いから保健室行つて来る」

「何よ・・・どうしたの？」

「先生に言つといて・・・ごめん」

そのまま由真は教室を飛び出し、早足で保健室とは逆の方向に向かった。

しんと静まり返った廊下に、授業をする先生の声がかすかに聞こえる。国語の時間だろうか、何かの話を朗読しているようだ。千裕のいるA組の教室は誰も居ない。移動教室なのだろう。

そのまま階段を下りて、人気のない西門から学校を抜け出した。確かめなくてはならない。

今すぐ、阿部先生たちに問い詰めたい事がある。

このまま流されてはいけない。

私が無力な保護下の人間だという事は認めざるを得ないけれど、いつたい私が何をしたい？

誰かに支配され、行きたい所にも行けないのはもう嫌だ。

高校に行きたい。

どんな高校でも構わないから、自分のやりたい事を探す時間が欲しい。

気がつくとうちは、上履きのまま駆け足でくすのき厚生館に向かっていた。

第二十三話 嘘

昭和63年に建てられたくすのき厚生館は、もう至る所にガタが来ている。

いつしか起こった地震の時にできた壁のヒビ、すっかりペンキの剥がれた外観等、館長ももうそろそろ本気で立て直しを考えているようだった。

今日は阿部先生が非番らしく、40代半ばのおっとりした神崎先生が庭の草むしりをしていた。

七月の眩しい夏の日差しが、小柄な中年女性の背中を照らしている。それが視認できると、ゆまは怒りと疲労で息を切らせながら駆け寄った。

「・・・神崎先生！」

急に声を掛けられて、小さな背中が弾かれたようにビクッと動いた。振り向きざま、先生が目を丸くする。

「由真ちゃん？どうしたの??忘れ物？」

「違う。先生、私にまだ言っていない事あるでしょ?すごく大事な事!!!」

明らかにいつもと様子が違う由真に、神崎先生はもしかやという顔でゆっくり立ち上がった。

しかし口から出たのはもっと別の事だった。

「学校はどうしたの由真ちゃん?それにカバンや靴は?」

「そんなのどうでも良いよ！すぐ戻るし！！・・・でも聞かなきゃ戻れない！」

力強く言った後、遠くで蝉の大群が鳴き始めた。シャアシャアという音が一帯を包み込む。

「そんなこと言って・・・」

口籠ったが、神崎先生は由真の顔を見てひとつ大きなため息を吐いた。

「まあ、入りなさい。お日様にやられるわよ」

先生は持っていた小さなシャベルを傍らに置いて、玄関のガラス戸を開けて促した。

入ると、館内は少しだけひんやりとして静かだった。

上履きを脱ぐと、急につま先が冷たくなった。

いつものスリッパを履く。

普段めったに入る事が無い事務室に通されて、きよろきよろしながらそこらの適当なソファに腰を掛けると、すぐ先生に呼び止められた。

一つだけ深呼吸した。

「これが由真ちゃんに関する書類よ。見せられるものだけ見せるわね」

マチのついた大きな茶封筒を受け取る。思ったよりもずっしりして分厚い。

今更何が書かれていようと怖くなんかない。

応接用のテーブルに封筒の中身をぶちまけて、一つ一つに目を通していく。

時々、母親の署名と捺印が為された書類が目につき、それをじつくり読んだ。

・・・一枚一枚に目を通すうちに、由真の目から僅かな希望さえも消え失せていった。

全てをまとめると、どうやら母親は単なる育児疲れと判断されたようだった。

カウンセリングだか供述だか判らないが、畏まった用紙に白々しいとは思えないような母の反省の弁が綴られていた。

”愛しい娘たちにとんでもない事を”

”大きな過ちを犯したと反省しております”

”死んで詫びたい気持ちで御座います”

それらの文字は欺瞞に満ちていた。

・・・よくもそんな事が言えたもんだ。

読み進めるうちに、耐えがたい程の憎しみが体中に満ちてきた。

”わが子を可愛いと思うあまり、しつけが行き過ぎてしまったのかも知れません”

”言う事を聞かなかった時のみですが、頬を数回叩いてしまったように思います”

”ぜひ更生して、再び娘たちと暮らしたいです”

言っている事が無茶苦茶だった。

どうやら自分のした事を認めるつもりも、ましてやそれについて謝罪する気も無い様だと

それだけははっきりと伝わった。

茫然とする由真の目の前に麦茶を差し出して、先生がようやく口を挟んだ。

「お母さんね、泣きながら市役所の方をお願いしたそうよ。一緒に暮らしたいって・・・」

その言葉に、由真は思わず逆上した。

「あの人が泣くのは自分がピンチに追い込まれた時だけだよ!!一度も他人の為に泣いた事なんて無いくせに・・・よくもこんな時に!!」

立ち上がって真っ直ぐに神崎先生の顔を見た由真は、どうやら先生もこの書類を信用していない事に気が付いた。

声こそ穏やかで気が付かなかったが、顔は微かに不愉快そうだった。

「こんな書類を鵜呑みにするのは、事情を知らない一般の人達だけでしょね。・・・児童福祉課も私たちも、こういう言葉は今までのろんな子の母親から聞いたのよ。

心の底から反省するのに、こんなに時間が掛らない訳は無いわ」

「じゃあなんで私たち連れ戻されるの?!」

「どうしても・・・もっと小さい子や両親のいない子供が優先されてしまうのよ。施設の数にも限界があるから」

それを言われたら、反論できなかった。私たちよりも弱者が優先されるのは、残念ながら当然だ。

「それじゃあ・・・私、高校行けないの？あの人、絶対私達にお金掛けてくれないよ・・・」

半ば絶望し掛けた由真に、神崎先生は言った。

「そんな訳無いじゃないの。勉学に励む児童は、市や国が必ず護ってくれるわよ！」

そう言つて、先生はパンフレットを持ってきた。
そこには”ヒマワリ母子寮”とオレンジ色のゴシック体で踊る様に書かれていた。

第二十四話 今、此処

神崎先生にパンフレットを渡され、由真は追い出されるようにくすのき厚生館をあとにした。

いつもの通学路をのろのろ歩きながら、気が付けば心とは裏腹に綺麗に晴れ渡った空を見上げていた。

人間途方に暮れると、うな垂れて足元を見るか、所為なく空を見上げるかのどちらかであるらしい。

とにかく全身から力が抜けてしまい、真っ直ぐ背筋を伸ばす事が出来ないのである。

パンフレットにある母子寮とは、要するに児童福祉施設に母親も同居するような物であった。

ただ、曲がりなりにも福祉施設であるため、寮母さんの監視や同居者の目もあり、これまでのように暴力を振るわれる事はほぼ無いようだ。

お金の面に関しても、母親の労働が義務付けられており、必要ならそこから子供の学費を捻出するよう指導されるらしい。10時以降の深夜間の外出は禁止されており、母が飲み屋で浪費する心配も無さそうだった。

でも……。

由真は深いため息を吐いた。

もう私達は、一緒に暮らせる程あの人を信用する事が出来ない。

鎖で繋がれた猛獣と同じ部屋で暮らすようなものだ。ワンルームだったし。

歩美だってせつかく元気出てきたのに、また口を利かなくなってし

まう。

幸運なことに、西門にはまだ人影が無かった。2時間目の授業が始まっているのかもしれない。

次の時間はたしか体育のハズだ。放課になるまでホントに保健室で避難しようかしら。

そう考えていると、スイミングバッグを持った詩織が丁度保健室へと向かっているのが見えた。

あわてて引き返す間もなく、曲がり角で鉢合わせになってしまった。一瞬ヤバいと思ったが、よくよく考えれば詩織なら口外しない気もした。

「詩織、どうしたの？」

「あれ？由真も何で？」

「あたし、ホントはちょっと外出してきたんだ。内緒にしといて」

「ふーん、ワルじゃん。アタシはせーりだよナプキン貰いに来たのさ」

「じゃあ見学組？あたし、今から行っても間に合うかな？」

「余裕でしょ。まだ皆着替えてるし、早く行つていだよ」

「よかった。ありがとう」

駆け出そうとして、由真はふと気になった。

「……詩織」

呼び止められ、詩織は大きな目をさらに見開いて振り向いた。

「先生何か言ってた？」

「ん・・・？・・・ああ、何も。心配してたよ、ミチハルが」

「またあ。ウソばっか言って」

そう言いつつも、顔はニヤケてしまった。どうも、コレばかりは素直に顔に出してしまう。

「本当だって！」

何故か、詩織まで嬉しそうに言った。

由真はくるとターンするように向きを変え、再び教室へと急いだ。ミチハルの事や、友人たちの事を考える時だけは、少なくとも由真は幸福な少女で居られた。

もう、それでも良いのではないか？

この先の事を気に病んでも仕方がない。今現在、少なくともここに在学している間は私は十分に幸せだ。

この時間を、この掛け替えの無い時間をめいっぱい楽しむ事が出来たなら、それだけでも良いんじゃないか？

例えこの一年が未来に繋がらなくても、私は今のこの時を、ずっと大切にして忘れないだろう。

それだけでも良いんじゃないか・・・？

この世に生まれ、物心付いてからずっと暗闇の世界にいた由真にと

つて、当たり前前の日常ほど尊いものは無かった。
そして今、まさにそれが手に入ったのだ。
その幸福が、由真を変え始めていた。

第二十五話 迷い心

「お前・・・本気？マジで東京行くの？」

ジメジメとした男子更衣室に、高宮の独特のボイスが響いた。何の事かと、体を拭いていた男子生徒が動きを止めて高宮を見た。まだ濡れた髪から水滴を滴らせながら、ミチハルが力強く頷づく。表情は、満面の笑みだった。

「マジでかよ！ミチハル、本当にピアニストになるの？！」

「マジだよ」

語勢を強めた後、ちょっと照れくさそうに濡れた水着を大袈裟に振るって水を切った。

それを丁寧にタオルで包んで、スクールバッグに入れる。きちんと手入れがしてあるせいか、ミチハルのスイミングバッグは3年間使っているとは思えないほど使用感が無い。

中に顔を突っ込んだら、あの新品のビニールバッグ独特の匂いがしそうだ。

「すげえなお前」

「凄く無いよ。まだまだ練習が足りないし、落ちたらこの辺の高校行くよ」

「この辺？オレ、藤ヶ丘受けるけどお前は？」

「僕も」

「はは、やっぱりか！お前、成績は大して良くないもんな？」

うるさいな、と言って高宮の尻にひざ蹴りを入れると、ミチハルはバッグを持ってサッサと更衣室を出た。基本的に集団行動というのが苦手な為か、ミチハルは親友の高宮とさえあまりベタベタしない。

しかしそのある意味であっさりしている所が、高宮にとっては付き合いやすい所でもあった。

”孤高の一匹狼”とまでは言えないが、他のクラスメイトよりも静かで大人びている。

由真がミチハルを好きでいる理由は、高宮にも何となく理解できた。

「あ・・・」

それを思い出して、高宮はタオルと水着を手に持ったままミチハルを追いかけた。

由真と大して仲がいい訳でも無いのだけれど、やはり気掛かりと言えば気掛かりなのだ。

「おい、ミチハル」

早歩きで追いかけると、渡り廊下ですぐに追い着いた。

「何？」

「お前最近水澤と仲良いよな？」

幼稚園からの仲だが、こういう話するのは初めてだ。どういう反応をするのか楽しみだったが、ミチハルは顔色ひとつ変えなかった。

「ああ、あいつは良い奴だよ。面白いし」

「東京の事、水澤には言ったのか？」

「言ったよ。一番最初に言ったかも」

「何か言ってた？」

「別に。頑張れって」

「・・・ふーん」

残念だったな水澤、まだ脈は無いみたいだ。

そう思いかけたが、何か言葉にし難い違和感を感じた。

・・・あれ？こいつ、歩くのこんなに速かったか？

いつもこちらが歩調を合わせないと置いて行きそうになるのだが、今日は違う。寧ろ高宮を置いて行きそうな速度だ。

もうすぐ授業も始まるし、まあ急いでるのかも知れないな。でも、それだけじゃない。何かおかしい。

何だ——？

「なあ、ミチハル」

早足のままミチハルに付いて行つた。

「何だよ？」

「・・・お前水澤どう思う？」

もはや核心を突いた質問だったが、ミチハルは前を向いたまま、立ち止まらずに答えた。

「どうって・・・良い奴だと思っけど・・・俺は・・・」

ああ、そうだ。

違和感の原因が見つかった。ミチハルの一人称が”僕”じゃない時、大体あいつは緊張しているか他の事を考えているのだ。自分の言葉遣いに気を使う余裕が無いのだろう。今、何らかの原因で。

「俺は？」

「何なんだよ！今日はなんかしつこくないか？」

どうやらこれ以上の深追いは逆効果になりそうだった。

「別に」。でもオレはまあまあ可愛いと思うぞ」

茶化すように言い逃げた。追い越して振り返ると、ミチハルは複雑な笑みを浮かべていた。

どうやらこの件に関しては明言するつもりは無さそうだった。

「可愛いよ。宮間よりは」

そんな事を言っ、お茶を濁した。

第二十六話 夕色の廊下

終業式を明日に控えた木曜日の放課後、

いつもの気だるい雰囲気が漂う美術室に珍しい訪問者が来た。

部長の緑里さんがイーゼルを担いで外から帰って来るなり、いつものクールな口調で由真にこう告げたのだ。

「水澤さん、高宮が呼んでる」

全く理由が思い浮かばない由真は、目を丸くして聞き返した。

「高宮君？何でだろう・・・」

「その廊下に居るよ」

振り返って、顎でしゃくる。

窓の外には夏の夕日が浮かび、校庭の運動部も片付けを始めていた。高宮の所属するバスケット部も、もう終わったのかも知れない。

ともかく、色鉛筆をガチャガチャと筆箱に詰め込んで鞆に放り込み、美術室のドアを開けた。

確かに、体操着姿でスクールバックを背負った高宮が無表情でそこに立っていた。

「どうしたの？ なっちゃんに誤解されちゃうよ」

冗談半分、本気半分で笑い、駆け寄った。

「いや、ちょっと気が向いたただけだ。聞きたい事もあるし・・・言いたい事もあるし」

「・・・ああ、そうか」

逐一説明しなくても、何の事が全て分かった。
高宮の顔が少しだけ険しくなる。

「やっぱり聞いたんだな？」

「うん・・・一応」

「そうか。まあ・・・歩け」

言うが早いか、高宮は小走りで美術室前を離れる。いくら口の堅そうな詩織や緑里さんでも、立ち聞きされるのは嫌に違いない。

由真も小走りになりながらスクールバッグを背負込む。

少し離れた人気のない廊下で速度を落とす。日の当たる渡り廊下は、西日で真っ赤に染まっていた。

「修学旅行の時か？」

「うん・・・新幹線の中でなっちゃんが変なこと言ったから・・・誤解を解こうと思って」

高宮の真剣な口調に、もしかして怒られるんじゃないかと由真は少し言い訳をした。

しかし、それを察した高宮は即座に弁解した。

「いや、別にいいんだそれは。俺はそんな事怒ってない。多分・・・亜紀が浮かれて話したんだろ？」

一瞬間間見えた恋人同士の空気に、再び祝福の気持ちが生かんできた。亜紀が白い顔を真っ赤にして微笑む様子を、自然と想像してしまう。

「それで・・・」

「うん？」

「二日目の朝、だけど・・・」

「それがどうしたの？」

「・・・水澤、お前何時に起きた・・・の？」

あの台風襲来（但し局地的）の翌日の事だ。

何時もなにも、朝食のバイキングに遅刻しそうな所を高宮も見ただけなのだが。

質問の意図が判らないまま、取りあえず素直に答えた。

「結構遅かったよ。朝方一回起きたんだけど、また寝ちゃって」

「そうか」

「何で？」

「いや、別に。部屋では何も無かったか？」

「うん・・・まあ、私となっちゃんは、ちょっとモメたけどね」

ヒヤリとしたが、さすがになっちゃんに言い放ったあの一言だけは

言えなかった。

やっぱり心配してたんだなあ、きつと一晩中。

「一応言っておくけど、言うなよ」

「わかってるよ！誰にも言っていないよ！！」

目を見開いて、”めっそうもない”という様に首を左右に振った。皆に言って盛大に祝いたいのは山々だが、知れたらマズイのが約一名居るので。

「でも、おめでとう。良かったじゃん」

「止せよ」

「じゃ、そう言うことで。また変な噂になっても困るし・・・ははは」

「まあ待てよ。ミチハルの事、聞きたくねえのか？」

殆ど走る体制になっていた体を、1、2歩スキップして誤魔化した。

「何それ。どんな話？」

「ミチハルがお前をどう思っているかって話」

「ウソ！そんな事聞いたの??！」

「え？いや・・・でも、あいつ結構態度に出るから」

「そうなの？私には全然わからないよ。ミチハルが何を考えてるの」

か」

それは今の由真にとって最も知りたい事だった。そして同時に、永久に分かり得ない様な気もしていた。心に準備も出来ないまま、先を促すように黙って頷いた。

「あいつさ・・お前を良い奴とか言ってたけど、ホントはちょっと違うと思うぞ」

喜ぶべき事なのだが、回りくどくて思わず由真は聞き返した。

「・・・それってつまり良い事なの？」

「お前が”良い奴”止まりで居たいなら、良くないな」

高宮がふざけて、さらに回りくどい言い方をした。

「じゃあな。黙ってるよ、亜紀の事は」

「あ、うん。勿論」

高宮がサッサと行ってしまった後も、一人仄々と喜びを噛み締めていた。

もしも・・万が一付き合う事が出来たなら、どんな生活になっても構わないからミチハルに付いて行きたい。それがどんなに無謀な願いだとしても。

ああ、神様。こんな時にしかあなたの存在を信じない、その程度の人間のお願いで聞いてくれるなら、私は今日から毎日祈りを捧げます。

どうか、私がこの先もしも結婚するならば、今までの人生で最も愛

した人と結ばれますように。

キリスト教徒の阿部先生の真似をして、胸に十字を切って祈った。

下校時刻を告げるチャイムが、彼方から聞こえるまで。

第二十七話 悪女

夏がどうして暑いのか、小学校の時理科教師に教わった気がする。それは太陽と皆の住む日本が最も接近する季節だからですよ、と。理由が分かった所で涼しくなるわけでもないもので、毎年近づいてくる太陽を疎ましく思っていたものだ。去年までは。

「つつーか何でスイカに塩かけるの?! 面倒くさくね?」

種すら一緒に飲み込むほど無神経な千裕が、由真の食べ方に疑問を差し挟んだ。

「こうすると甘くなるんだよ。千裕も種くらい出せばいいのに。盲腸になっちゃうよ?」

「残念でした! 盲腸は2年の時に切ったもんね。平気平気」

「ふーん……。まあ、栄養はありそうだけど」

眩きながら由真は、千裕が食べた後のスイカの皮をしげしげと見つめた。

猛暑とは言え、7切れも食べてお腹壊さないのかな。

残ったスイカの皮をお腹を空かせたカブトムシが居る水槽に落として手を拭いていると、食堂に小学生たちがなだれ込んで来た。

行儀の良い女の子たちは、自ら手を洗ってニコニコしながら大皿のスイカに手を伸ばしている。

なんだか微笑ましい光景だと思う。

「あー！！ちひろ達が先に食べたー」

「ちひろのデブー！！」

泥臭いバケツを提げて来た小学校4年生の裕也と健太が金切り声を上げて抗議した。

近くの河へ行ってきたのだろう、二人ともハーフパンツの裾がビシヨビシヨになっているし真っ赤に日焼けしている。

例のごとく、千裕がどやしつけた。

「うつせえガキ！！手え洗ってこい！まだいっぱい有るだろ！」

どうやら最近は千裕が怒鳴っても効き目が無いようで、何も聞こえなかった様な顔で泥バケツをその辺に置いてそのままスイカをシャリシャリと食べ始めた。

「こら！手を洗ってから食べなさい！」

二人の背後から、厳しい声がした。

神崎先生に叱られると、二人は手洗い場へ直行した。一番優しい神崎先生だが、怒ると一番怖いというのも二人は散々見てきたので。

と、先生が窓の外を注視したかと思うと、下を指さして千裕を呼んだ。

「千裕ちゃん、あの子お友達でしょう？ほら・・・誰だっけ？？」

「誰？よっしー？」

「嫌だわ、名前が出てこないの・・・男の子よ。色が白くて、ほら

「一度このピアノでカノンを弾いてくれた子」

千裕が？ああ、ミチハルか」と言う前に、由真の瞳がまんまるになった。

自分がココに住んでいると知れたら、やっぱりミチハルも同情するのかしら。

それとも何とも思わないのかな？千裕とはもう友達な訳だし・・・いや、でもなんか嫌だな。ココに居るのを見られるの。

「由真、早く行くぞ」

おしほりを握りしめて茫然と座る由真の腕をぐいと掴む。
顔を見ると、やはりニヤニヤしている。完全に面白がっている。

抵抗するも腕を引っ張られ、足をよたよたさせながら階段を下りて・
・気付いた。

「ちょっと・・・ちょっと待って！！私これパジャマ！」

由真の声が廊下に木霊したが、すぐにこんな返事が返って来た。

「別に気にしないよ由真ー」

とても優しいげな、いつもの柔らかいミチハルの声。

踊り場から下の階を見降ろすと、制服姿のミチハルとばかり目が合った。

口がぽっかりと開き、思考が停止してしまった。

あんまりだ。せめて普段着に着替えていれば良かった。

「おはよー。寝起き？遅いね」

少し笑って、それからいつも持ってるあのバインダーを開いて、なにか白い紙を取り出した。

本当に、どこへ行くときも持っているのだ。

「由真と千裕も来るでしょ？キャンプやるって」

「・・・キャンプ？クラスで？？そんな話出て無いよ」

「先生には内緒のやつだよ」

「内輪だろ。今年もやんのかよ、わざわざチラシまで作りやがって」

A4サイズの普通紙には、いかにも初心者がエクセルオフィスで作ったような”お泊まり会の案内”が印刷されていた。

胸が躍る。何て良い夏休みだろう、きっと楽しい事ばかりに違いない。

「テントとかは？第一、阿部先生たちには何て言うの？」

「毎年ミッチーんちのロッジでやるんだよ。先生には学校行事とか言っときゃ良くね？」

「ロッジ！！？」

「こいつの家超金持ちなんだぜ」

金持ちなんだぜ、と言われたミチハルは少し複雑な顔をして顔を伏せた。

「そんなことないよ」

と、決まり悪そうにファイルの留め具をパチンと閉じる。

「他に誰が来るの？」

「あと、佑介と・・・詩織も誘ったんだけど家族旅行だって」

「それと・・・佑介が森下も連れて来るって言ってたけど・・・」

ついに皆に言うのかな？

・・・まあ、いつまでも皆に隠してるのはしんどいだろうし。

「・・・・・・・・？どうしたのミチハル？」

なんだか浮かない顔だ。

申し訳なさそうな口調で・・・

・・・・・・・・ミチハルは信じられない言葉を口にした。

「森下に・・・先月・・・告られたんだ。・・・どうすればいいのかわからないよ、ホント」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4673h/>

ミチハルへ

2010年10月9日12時04分発行